



特集 2025年ランドスケープコンサルタンツ協会賞(CLA賞)

no.
186

一般社団法人ランドスケープコンサルタンツ協会は、GREEN×EXPO 2027の花・緑出展に内定しています。

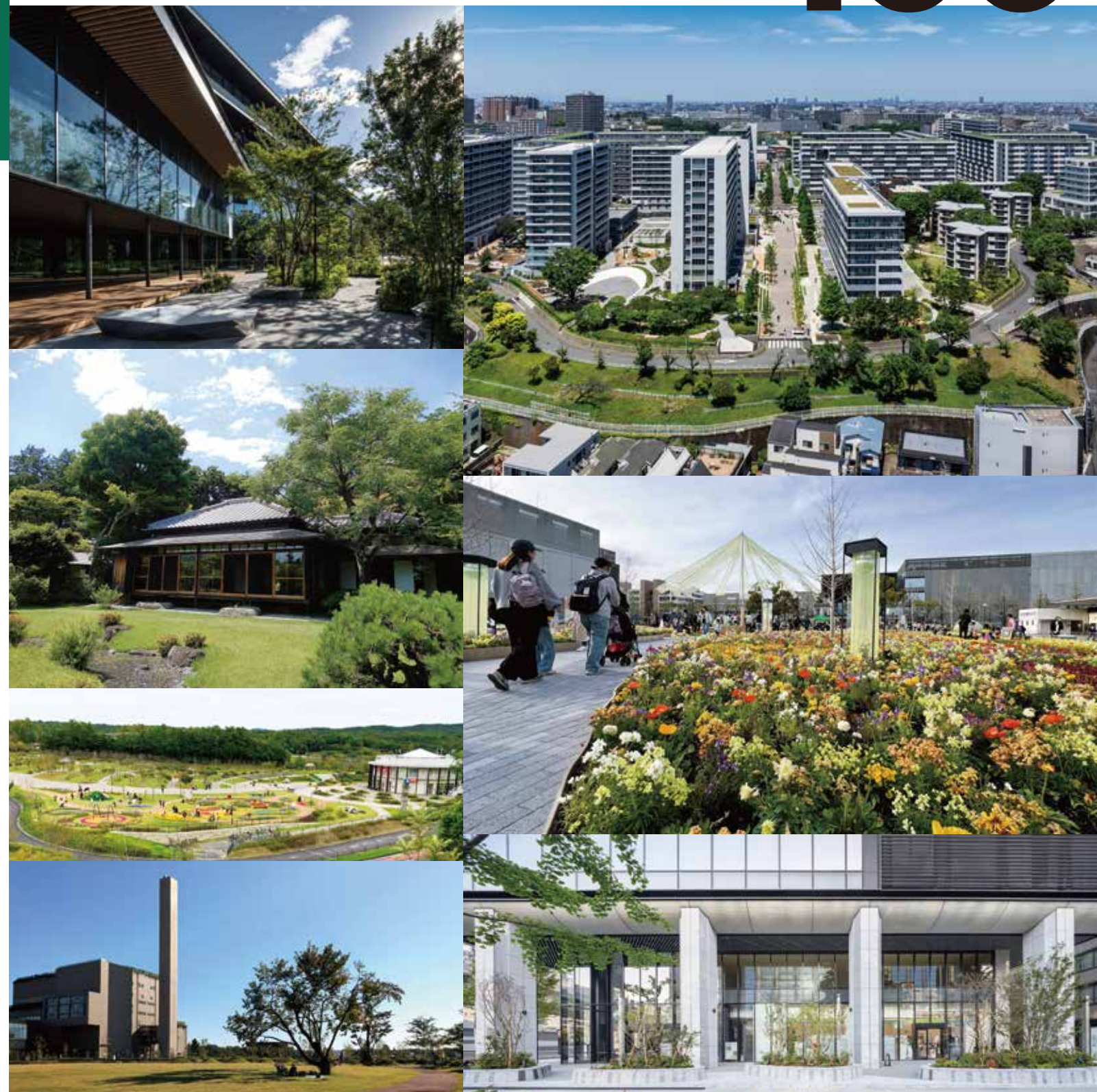
一般社団法人ランドスケープコンサルタンツ協会

会 長：金清典広
副会長：金子隆行・宇戸睦雄・大杉哲哉
事務局長：狩谷達之

〒103-0004 東京都中央区東日本橋3-3-7 近江会館ビル8F
TEL：03-3662-8266 FAX：03-3662-8268
HP：https://www.cla.or.jp/ e-mail：info@cla.or.jp

支部事務局

北海道支部	〒004-8585 札幌市厚別区厚別中央1条5丁目4番1号
支部長：福原賢二 事務局長：本郷真毅	TEL：011-801-1535 FAX：011-801-1536
東北支部	〒010-0973 秋田市八橋本町4-10-26 株式会社緑設計内
支部長：板垣清美	TEL：018-862-4263 FAX：018-862-4273
関東支部	〒103-0004 東京都中央区東日本橋3-3-7 近江会館ビル
支部長：板垣久美子	TEL：03-3662-8266 FAX：03-3662-8268
中部支部	〒461-0005 名古屋市東区東桜2-17-14 日本工営都市空間(株) 内
支部長：則竹登志恵 事務局長：水谷吉宏	TEL：052-979-9111 FAX：052-979-9112
関西支部	〒530-0014 大阪市北区鶴野町4-11-1106 株式会社エス・イー・エヌ環境計画室 内
支部長：西辻俊明 事務局長：津田主税	TEL：06-6373-4117 FAX：06-6373-4617
九州支部	〒810-0004 福岡市中央区渡辺通5-10-10 株式会社緑景 九州事務所 内
支部長：大杉哲哉 事務局長：谷山恵一	TEL：092-713-8765 FAX：092-713-8759



一般社団法人ランドスケープコンサルタンツ協会 基本理念

我々の使命は、新たな環境認識のもとに、
人と自然との関係を科学的、芸術的に把握し、
環境と調和・融合した新しい秩序づくりに積極的に挑戦することによって、
安全で豊かな環境の創出、
すなわち、「みどりの環境文化」の形成に寄与することです。

1

ランドスケープアーキテクチャーの専門家集団

我々は、日本におけるランドスケープアーキテクチャーの思想と技術を
継承し、発展させるために組織された専門家集団です。

2

新しい技術の開発と研鑽

我々は、来たるべき21世紀の社会に対する責任を十分認識し、
技術の高度化と多様化に対応した新しい技術の開発と研鑽を推進し、
技術競争の時代に対応します。

3

社会的信頼を獲得

我々は、社会的倫理観のもとに、公正な技術競争を通し、
内外の要請にも応えられる自立した職能として社会的信頼を獲得すべく行動します。

4

開かれた技術団体

我々は、内外の関連技術者との交流を通して、協調関係を積極的に推進し、
多様な価値観を内包する開かれた技術団体として広く展開します。

5

魅力ある創造的職能

我々は、経営体質の向上と安定を図ることによって、魅力ある創造的職能として
広く社会から信頼されることをめざします。

平成7年5月

「新しい環境文化の創造 ―造園コンサルタントビジョン―」より



特集：2025年 ランドスケープコンサルタンツ 協会賞 [CLA賞]

最優秀賞

【設計部門】

ヌーヴェル赤羽台F街区のランドスケープデザイン 2

優秀賞

【設計部門】

全国都市緑化かわさきフェア 会場計画等実施設計及び植物監理 4

特別賞

【設計部門】

ニコン 本社/イノベーションセンター 6

【設計部門】

皆春荘・旧松本剛吉別邸―近代小田原別荘文化の復元― 8

【設計部門】

大阪堂島浜タワーランドスケープ 堂島川水辺空間整備 10

奨励賞

【設計部門】

愛・地球博記念公園花の広場リニューアル 12

【設計部門】

立川市クリーンセンターたちむにいひろば 13

CLA賞の趣旨と募集・選考のあらまし 14

2025年CLA賞 受賞技術者プロフィール 15

GREEN×EXPO 2027について 18

GREEN×EXPO2027へのCLA出展について 22

〔企画特集〕 みどりでまちが変わる、人とつながる 24

・「みどり」でまちが変わり、人とつながる 25
～青の国「普代」を事例に～

・シンボルブロムナード公園「花の広場」 28
ナチュラリスティックガーデン
(東京都江東区有明 都立海上公園)

・人とひと、人とみどりをつなぐエディブル・ランドスケープ 34
EDIBLE WAYプロジェクト

・にっぽーくで目指す 39
インクルーシブな人・物・場づくり(羽村市)

・館山市における公園から「みどりのまちづくり」へ 42
～地方都市での都市公園の指定管理者の取り組み～

表紙デザインは、2025年CLA賞
の受賞作品7点の写真をコラージュ
したもので、今回は団地の再開発
から、都市緑化フェア会場、オフィ
スや都市空間、日本庭園や都市公
園と、質の高い多様な空間の整備
が集まりました。
人々の生活の質を高め、そのため
の基盤としての緑の空間を保全・
創造していくことがランドスケープと
いう仕事です。これからは私たちの
職能を社会にアピールし、より良い
環境づくりに貢献していきます。

会員名簿 46



①南側崖線からのF街区全景
②保存木をシンボルとしたけやきテラス
③ミュージアム棟と流政之氏のファニチャーのある屋外展示空間

ヌーヴェル赤羽台F街区のランドスケープデザイン

株式会社 総合設計研究所

前川和美・石井ちはる・志村 勝・武田栄文

独立行政法人 都市再生機構

有本幸代・石原 力・福田千夏・大崎貴弘・渡邊舞子

木下 冴・村尾 駿・酒井亜実

株式会社 E-DESIGN

忽那裕樹・山田 匡・石原康宏・瀬野瑞季

ディーワーク・窓建コンサルタント JV

新見 宏・新津光人・安田英樹・井口 歩・伊藤 功・藤吉崇人

島根俊宏（元所員）

株式会社 みのべ建築設計事務所

蓑部和人・石丸豊二・富田倫行

株式会社 遠藤剛生建築設計事務所

遠藤剛生・浦田寛史・足立明日香

山・山本堀 設計共同体

照沼博志・平田智隆・山本圭介・堀 啓二・林 孝行・高井紀宏

設計組織 ADH 渡辺真理・木下庸子

株式会社 近田玲子デザイン事務所 近田玲子・高永 祥

赤羽台団地は大規模団地として旧陸軍被服本廠跡地に建設され、昭和37年に入居が開始された。建物の老朽化等により平成11年度から「ヌーヴェル赤羽台」の建替事業がスタートし、計画段階から事業者・マスターアーキテクト・設計者による「デザイン調整会議」を実施し、街並み景観等の調整を進めてきた。建替の最後の街区であるF街区は、住棟とコミュニティ活動の場の整備、登録有形文化財の建築と新設するミュージアムのフィールド整備など、多様な要素の特性を活かして、まちづくりに貢献する屋外環境を形成することを目指した。

記憶の継承（景観資源などを継承）

F街区は、既整備街区の軸線や崖線沿いの眺望と緑のネットワークを踏襲するとともに、シンボルツリーや梅公園を保全し、居住者に馴染みある園地のオーバル線形をモチーフにしたデザインなどの再現により、記憶の継承を図っている。

また、被服本廠の発掘調査で出土したレンガなどの再利用や

作品概要

作品名——ヌーヴェル赤羽台F街区のランドスケープデザイン

所在地——東京都北区赤羽台二丁目、一丁目 他

発注——独立行政法人都市再生機構 東日本賃貸住宅本部

設計——株式会社 総合設計研究所（ランドスケープ基本・実施設計、設計監理）

独立行政法人 都市再生機構（企画・設計監理）

株式会社 E-DESIGN（ランドスケープ基本計画、マスターアーキテクト）

ディーワーク・窓建コンサルタントJV（14号棟設計）

株式会社 みのべ建築設計事務所（15・17号棟、駐車場、付属棟設計）

株式会社 遠藤剛生建築設計事務所（16号棟設計）

山・山本堀設計共同体（19号棟設計）

設計組織 ADH（ミュージアム棟設計、マスターアーキテクト）

株式会社 近田玲子デザイン事務所（照明デザイン）

設計協力——株式会社 ケイエムディー（サインデザイン）、三戸久美子（樹木診断）

監理——株式会社 URリンケージ

株式会社 佐伯設計監理事務所、まち環境エンジニアリング 株式会社

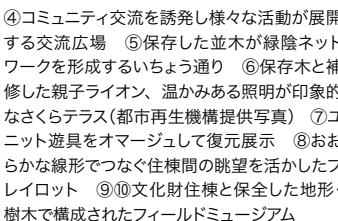
施工——西武造園 株式会社

設計期間——2020年9月～2024年10月

施工期間——2021年2月～2024年10月（屋外工事）

規模——約3.1ha

主要施設——いちよう通り、交流施設、プレイロット、けやきテラス、さくらテラス、梅公園、菜園、住棟、フィールドミュージアム、ミュージアム棟



従前の藤棚・プレイスカルプチャーを復元・補修し、印象的な点景になるように配置している。

コミュニティ交流の場をつくる

アウトドアリビングの場となり交流を誘発するテラス空間、収穫を体験できる菜園、イベント活動などを支援する空間と設備を整備するとともに、季節の催事を体験できる場として「二十四節気による魅力づくり」に取組み、節気にちなんだ植栽と設えにより、コミュニティ交流の場を演出している。

個性的な建築をまとめ、環境配慮の取組を景色にする

個性を発揮する建築デザインをランドスケープデザインでまとり感を形成することに注力し、住棟間の連続するオープンスペースをおおらかな線形にすること、素材や色彩をシンプルにすること、舗装材やファニチャーが連続して建築に入り込むことで、一体的な空間と景観を形成している。

また、二十四節気と連動した生物多様性に配慮する植栽構成、雨庭等で風情ある雨水浸透の演出など、環境配慮の取組みが身

作品評

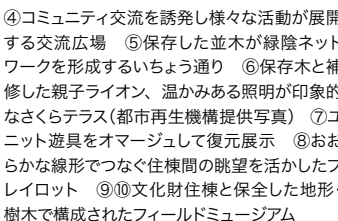
本作品は、1960年代に都内初の大規模団地として建設された、赤羽台団地の建替え最終街区を対象とするランドスケープデザインである。

赤羽台団地は、建設当初よりコミュニティ施設の整備、並木や崖線沿いの緑地を軸とする緑のネットワーク形成等の先進的な緑のデザインが導入された住宅地であり、建替えにあたっては、これらの資産の継承を念頭に置いた「記憶をつなぐ庭」が街区形成の基本コンセプトとして掲げられている。

このコンセプトに沿って、ランドスケープデザインでは、景観資源である公園・緑地の保全、広場から崖線側に開けた眺望景観の継承、並木や景観木の保全、広場・菜園・プレイロット等の多彩なコミュニティ活動の場の整備、登録有形文化財である保存住棟を緑が柔らかに包み込む暮らしの風景の再生などを実現させており、これらが相互に連携して、記憶を引き継ぎ現在のニーズにも幅広く対応できる複合的機能を備えた良質なランドスケープ空間の創出に見事に成功している。

工事完了後は、屋外空間を利用したコミュニティ活動が活発化しており、この点においてもランドスケープデザインの有効性を実証する良い事例となっている。

上記の要素や応募資料の構成の良さなどが総合的に評価され、本年度の最優秀賞に選出された。



④コミュニティ交流を誘発し様々な活動が展開する交流広場 ⑤保存した並木が緑陰ネットワークを形成するいちよう通り ⑥保存木と補修した親子ライオン、温かみある照明が印象的なさくらテラス（都市再生機構提供写真） ⑦ユニット遊具をオマージュして復元展示 ⑧おおらかな線形でつなぐ住棟間の眺望を活かしたプレイロット ⑨⑩文化財住棟と保全した地形・樹木で構成されたフィールドミュージアム

近な景色となるように展開している。

「まちとくらしのミュージアム」の展示空間と居住環境の一体化

登録有形文化財の住棟及び都市と集合住宅の変遷・歴史を紹介する「まちとくらしのミュージアム」の屋外をフィールドミュージアムとし、展示空間でありながら居住者や来訪者の憩いや交流の場として整備した。都市再生機構が長年取組んできた「良好な住環境づくりを支えてきたランドスケープ」を体感できる空間として「環境のスケルトンの保全」「人と共にある風景の動的保全」「赤羽台団地の今と昔」をコンセプトにおき、地形・樹木を保全し、団地創設期の遊具やファニチャーなどを復元して団地の生活シーンの場を利用する姿も展示要素とした。

地域と連携した様々なコミュニティ活動が展開

建替後の屋外空間では、居住者と地域の方の日常利用だけでなく、お祭りや様々なイベントが開催され、「まちとくらしのミュージアム」では多くの見学者が来訪し、地元大学や団体などとの連携により新たな取組みを生む場となっている。



優秀賞



全国都市緑化かわさきフェア 会場計画等実施設計及び植物監理

株式会社ライフ計画事務所

立川直樹・金子隆行・加藤直人・塚本浩史・中村 葵

株式会社あい造園設計事務所

鈴木 綾・菊池俊一郎・米澤知巳・本間理子（元所員）

関根千那望

株式会社 総合設計研究所

大瀧英知・加藤雄介・大石佳奈・小山田和心

秋・春の2期開催を実現

第41回全国都市緑化かわさきフェアは、川崎市市制100周年記念事業のコア的事業として、また、緑化フェアとしては初めてとなる秋・春の2期開催を実現しました。

川崎らしい会場づくり

富士見公園、等々力緑地、生田緑地を3つのコア会場とし、各エリアの特性を踏まえて設定したコンセプトを具現化した会場づくりを行いました。

CLA 会員3社 JV による業務実施体制

3社による共同企業体（JV）を構成し、3つの会場それぞれを担当しながら、フェア全体を統一させるため常に連携を図りました。また、デザイナーとの協働や学生ワークショップとの連携、既存活動団体と協働した装飾制作等、独自性のあるコンテンツ制作にも、各社の強みを活かして取り組みました。

作品概要

作品名	全国都市緑化かわさきフェア会場計画等実施設計及び植物監理
所在地	神奈川県川崎市内（富士見公園・等々力緑地・生田緑地 他）
発注	川崎市市制100周年記念事業・全国都市緑化かわさきフェア実行委員会
設計	ライフ計画・あい造園・総合設計共同企業体
設計協力	株式会社Q-GARDEN／NENOUWASA／有限会社 緑花技研
監理	第41回全国都市緑化かわさきフェア実行委員会（会場整備等） ライフ計画・あい造園・総合設計共同企業体（植物監理）
施工	第41回全国都市緑化かわさきフェア植物調達協議会
設計期間	2023年6月～2024年6月
施工期間	会場基盤整備等業務（2024年4月1日～2025年6月30日） 花壇植栽等業務（2024年5月14日～2025年6月30日）
規模	面積（富士見公園17.0ha、等々力緑地43.5ha、生田緑地117.4ha 他）
主要施設	富士見公園会場（メインガーデン／垂直花壇／農と自然のガーデン／庭園展／自治体出展花壇／修景花壇 等） 等々力緑地会場（Active Garden／Active Garden's／パレットの花壇／ロングボーダーガーデン／修景花壇 等） 生田緑地会場（竹のエントランスゲート／藍と霧のメタセコイア／思い出のカナール（ばら苑） 等）
開催期間	秋会期 2024年10月19日～11月17日（30日間） 春会期 2025年3月22日～4月13日（23日間）

作品評

全国都市緑化かわさきフェア（以下、「本事業」という。）は、川崎市の3会場において、秋・春の2回開催する事業である。本作品は、「会場計画」、「出展展示」、「会場運営」、「交通輸送」、「協働推進」、「営業参加」、「行催事」の事業推進に必要な会場実施設計である。

応募者はきびしい設計工程に対応するために、CLA 会員3社による共同事業体を構築し、各社の強みと相乗効果を活かして業務に取組んだ。3会場は、「多様性×みどり」、「体験・体感×みどり」、「文化・歴史×みどり」をテーマとする。本作品の特色は、秋・春2回の開催期間における季節変化に応じた会場づくり、会場ごとに異なるコンセプトの具体化、市民参加の取組み、市内造園事業者等で構成する「植物調達協議会」による一貫した実施体制との連携があげられる。

本事業は目標来場者数160万人を上回った。3会場で2期開催という困難な条件のもと、3社はそれぞれの強みを生かし、互いに協力しあってきびしい工程を克服して目標達成に貢献した。本事業で成し遂げた3社の功績に対して賛辞を惜しまない。



①富士見：メインガーデン「Colors, Future Garden」（春）②等々力：メインガーデン「Active Garden」（秋）③生田：藍と霧のメタセコイア（秋）④富士見：メインガーデン（秋）⑤富士見：ライトアップされた工場モチーフ（秋）⑥富士見：自治体出展花壇（春）⑦等々力：正面広場花壇&ゲート（春）⑧等々力：ロングボーダーガーデン（春）⑨等々力：木陰のレスト空間（春）⑩生田：竹のエントランスゲート（秋）⑪生田：藍と霧のメタセコイア（秋）⑫生田：協働の「花づくり・花かざり」（ばら苑）（秋）

「多様性×みどり」富士見公園会場・エリア

工場群を模した大型装飾物やその先の広大な花畑で表現した「メインガーデン」は、再編整備を終えた新しい富士見公園のエントランス広場全体を大胆に活用しました。多様なスタイルの出展展示に対して配置や基盤、設備等の設計を行いました。

「体験・体感×みどり」等々力緑地会場・エリア

再編整備を控える等々力緑地では、木製パレットを活用した仮設・可動の花壇を施しました。五感をテーマとし、触れて、遊んで楽しめる体験型コンテンツを織り交ぜ、ニューノーマルな屋外の楽しみ方・過ごし方を提案する展示としました。

「文化・歴史×みどり」生田緑地会場・エリア

歴史や文化を学び楽しむ活動を展開し、人と自然のつながりを大切にしました。地域資源やアート作品、歴史的建物と調和させることで、自然を感じる機会を作り、協働の担い手を育み、緑地の保全と利用の好循環を進められる展示としました。

花壇設計・監理

同一ガーデナーが3会場の花壇設計と植物監理を一貫して行い、2期開催に伴う季節変化や現場状況の変更等に柔軟に対応しました。また、植物ボランティア協働や学校参加の花苗作り等の市民総参加型のみどりの取組みとも連携しました。



特 別 賞



ニコン 本社 / イノベーションセンター

株式会社三菱地所設計
松榮宏幸・朱豊・大谷育夢

ニコンゆかりの地である西大井に本社機能やR&D部門を集約し、先進開発機能の強化やシナジー創出を図り、持続的成長の実現を意図したプロジェクト。3,000人を超える社員だけでなく、ニコンファン、地域住民、取引先など、多様な人々がニコンを知り、様々な発見と交流を生み、イノベーションを興し、創造を育むワークプレイスとしている。

本プロジェクトで緑豊かなワークプレイスが創造される前までは、カメラ生産ラインのある工場の一部で、緑やオープンスペースに乏しい、生産性を優先した環境であった。また、工場南側に流れていた立会川も昭和40年代に暗渠化され、水面

作品概要

作品名——ニコン 本社/イノベーションセンター
所在地——東京都品川区西大井1-5-20
発注——株式会社ニコン
設計——株式会社三菱地所設計
設計協力——株式会社oriori
監理——株式会社三菱地所設計
施工——株式会社安藤・間
設計期間——コンペ 2019年7月～11月
設計 2020年1月～2022年3月
施工期間——2022年9月～2024年5月
規模——敷地面積: 18,063.61㎡、建築面積: 11,369.96㎡
主要施設——事務所

作品評

本作品は、ニコン創業初期の地において関東各地に分散していた研究機能を統合したイノベーションセンターの計画である。閉鎖的な工場跡地を、社員のみならず地域住民にも開かれた空間へと再構築し、「水・緑・光」を主題として環境意識の向上に寄与する点が注目される。また、生物多様性国家戦略やTNFDに配慮した取り組みは、企業施設における環境共生型デザインの一事例として評価される。しかしながら、掲げられたコンセプトである「暗渠化された水の記憶と光学通りの緑の連続性」が具体的にどのように設計的手法として表現されているのか、応募資料からは十分に読み取れない点が指摘された。また、掲載写真から植栽へのこだわりが確認できるにもかかわらず、植栽計画に関する説明が欠落しており、環境配慮の実践を裏付ける資料が不足している。資料のビジュアル性は高いが、図面等を通じて設計上の検討過程を提示していれば、より高い評価に繋がったと考えられる。



街とつながる地上階では地域と社員と生き物が出合えるよう、木陰のベンチや巣箱、バードバスを設置。建築テラスでは社員同士のコミュニティを育む多様な環境を様々なファニチャーを用いて創出した。

の姿を潜めている。

そこで、本プロジェクトでは様々な交流やイノベーションを育むワークプレイスを目指すと共に、ニコンの技術の根源である光をモチーフに、人々を取り巻く自然の光をデザインに取り入れ、「光に出会い。光が繋ぐ。」をランドスケープのコンセプトに掲げた。

現在と過去の周辺環境から計画地全体を「水と緑の結節点」と位置づけ、また、建築配置により生まれた空間の場所性を紐解き6つにゾーニングし、様々なシーン、ワークプレイスを創出した。屋上テラスも近接する執務空間との関係性を意識しつつ、多様なワークプレイスやコミュニティ、空間利用ができる

よう、様々な空間スケールと居場所が点在するデザインとした。

緑化計画においては、在来種を主体とした構成とし、工場跡地からのネイチャーポジティブを目指し、緑で敷地と建築物を被い、多様な生き物の拠り所になる設えを施した。例えば実や花のなる樹木を通り沿いや屋上に配置、雨水の保持による高湿潤な環境の創出、バードバスや巣箱の設置など、生き物を身近に感じるワークプレイスとすることで、人と自然の交流を育み、人の Wellbeing と多様な生態系への貢献を試みた。

今後、この地に多くの人や生き物が集い、相互に輝きを放つ街となることを願っている。



特別賞



皆春荘・旧松本剛吉別邸 —近代小田原別荘文化の復元—

株式会社 CES. 緑研究所 手塚一雅・手塚悦子
株式会社建文 福田昌弘・牧野 徹
緑栄造園土木株式会社 小山健次・小林 徹
ハマー建設株式会社 濱野利幸

明治40年(1907)、山縣有朋(以下「山縣」とする)が小田原へ移住したことを契機に、多くの政財界人が政治的理由から同地に別荘を構えるようになった。こうして形成された「小田原別荘時代」は、山縣の死去および関東大震災による壊滅的な被害を受け、終焉を迎えた。本作品は、明治から大正にかけ

て小田原の別荘文化を築いたとされる山縣の邸宅(古稀庵)の一部である皆春荘と、当時の政治の情に精通し、山縣と親交があった松本剛吉の別邸として知られる2つの庭園を復元したものである。

【皆春荘】

皆春荘は、山縣によって作庭された庭園として記録されている。山の中腹に位置し、眺望に優れ、自然の風景や箱根山から相模湾までの景色を望むことができる。自然主義で知られる無鄰菴や古稀庵の風景や庭園構成に類似しており、自然の姿を取り入れた山縣の作庭の特徴がよく表れ、作庭者自身の自然観が

作品概要

作品名——皆春荘・旧松本剛吉別邸 —近代小田原別荘文化の復元—
所在地——神奈川県小田原市
発注——小田原市文化部文化政策課、建設部みどり公園課
調査・設計——株式会社CES.緑研究所、株式会社建文
施工——緑栄造園土木株式会社(皆春荘)
ハマー建設株式会社(旧松本剛吉別邸)
監理——株式会社CES.緑研究所、株式会社建文
設計期間——2021年9月～2023年7月
施工期間——2024年4月～2025年3月
規模——皆春荘:0.28ha
旧松本剛吉別邸:0.20ha
主要施設——皆春荘:主屋、表門、滝、流れ、芝庭、アプローチ通路
旧松本剛吉別邸:主屋、茶室、流れ、芝庭、回遊式園路

作品評

本作品は、1年をかけて現況の調査・歴史的考察と多くの関係者との対話や調整を進めて整備計画を取りまとめ、翌年に実施設計、その翌年に設計監理を行った後に完成したものである。小田原市周辺では国による別荘庭園の復元も進められているが、市でもこうした歴史的風致を守り育て、賑わいと交流のまちづくりを進めている。

復元・完成したそれぞれの庭園は、緻密な歴史的考察により築造者の当初意思を十分に再現されたものと考えられ、復元された庭園の美しさが際立っている。また、施工により確認された遺構の保護・再生や、完成後の見学会などのイベントも開催されている。長年に亘る関わりの中で、応募者が総合プロデューサーとしての役割を十分果たした結果と評価された。

しかし、こうした成果も含めて、選考委員会では、設計部門への応募というより、プロジェクト全体を通したマネジメント力への評価が高く、この点から特別賞という扱いとなった。応募部門の設定については、委員会から主催者への提言がなされているが、応募者としても、惜しまれる点であった。



反映された庭園である。復元にあたっては、山縣の自然観および作庭観を現代に伝える庭園としての意義を重視した。

【旧松本剛吉別邸】

旧松本剛吉別邸は、主屋と別棟の茶室に囲まれた小田原では珍しい回遊式庭園であり、随所に煎茶を楽しむための意匠が施されている。これまで山縣が作庭に関与したと伝えられてきたが、作庭者は不詳である。庭園は部分的に改変され、流れの水源も失われているが、小田原別荘庭園の変遷を垣間見ることができる貴重な事例である。各時代の所有者による作庭の積み重ねを伝えられるよう配慮しながら、復元を行った。

【保存と活用の考え方】

庭園における作庭意図を尊重した構成を可能な限り保存し、作庭観に基づく思想を正確に後世へ伝えるとともに、庭園とそれを取り巻く文化的価値を体験できる場としての活用を図った。植栽や施設などは、古図面や古写真をもとに可能な限り復元しながら、当時の面影や利用形態に配慮した活用方法を検討した。

整備後、指定管理者による運営管理が行われ、小田原市の観光振興に寄与するエリアマネジメントの一翼を担っている。これにより、小田原の近代別荘・庭園文化を今に伝える庭園として、地域の活性化に貢献している。



特別賞



大阪堂島浜タワーランドスケープ 堂島川水辺空間整備

株式会社 三菱地所設計

ランドスケープ担当：西垣和真・塚本敦彦
三浦康孝（元社員）

プロジェクト統括：名倉良起

建築担当：尾杉友浩・石川一平

電気設備担当：近藤 卓・上田早紀

「浪華八百八橋」、川と橋のネットワークで発展した水都・大阪。本計画では、民間開発による大阪堂島浜タワーのランドスケープだけでなく、堂島公園、堂島浜船着場などの公用地を一体的に整備することで、堂島川と御堂筋に面した川と陸の結節点に1「賑わいの起点」を形成し、新たな人の流れや活動を生み出すことを目指した。「水都の賑わいをむすぶ・結ぶ・掬ぶ」というテーマのもと、地域の新たなシンボルとなるランドスケープの創出を図った。

「水都の賑わいをむすぶ・結ぶ・掬ぶ」新たな賑わいの起点

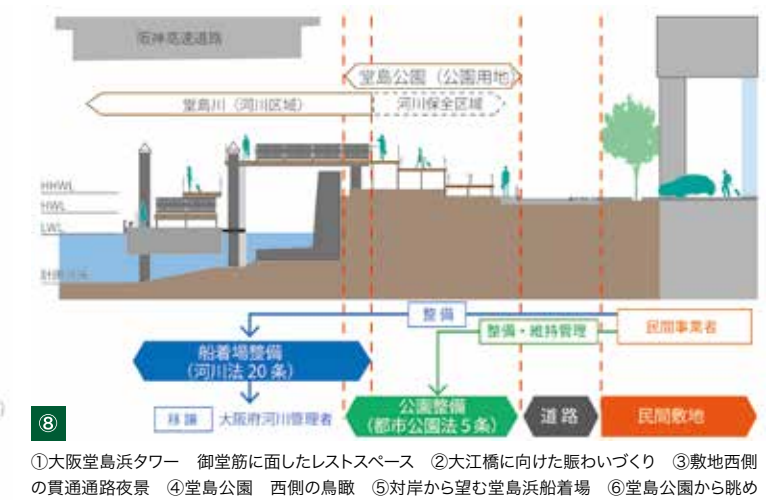
「大阪堂島浜タワー」が建つ大江橋の袂、その北側の地域では、建物が密集し、オープンスペースが不足しており、道路の歩道は十分な幅員や緑が乏しく、ウォーカビリティが低い課題があった。これを解消し、エリアの回遊性・利便性を向上するため、水の動きや表情を取り入れた、新たな賑わいの起点となるランドスケープを目指した。御堂筋に面する敷地東側に、ベンチやドライミストを併設したレストスペースと植栽を設け、西側には四季の移ろいを感じる貫通通路を設けた。また、敷地南側のケヤキ、北側のケヤキとタブノキが混在する列植は、周辺エリアと連携した街並み・緑のリレーに配慮し、歩行空間と一体に新たな緑のネットワークを形成している。

作品概要

作品名——大阪堂島浜タワーランドスケープ 堂島川水辺空間整備
所在地——大阪府北区堂島浜1丁目
建築主——オーエム4特定目的会社
設計監理——株式会社三菱地所設計
設計協力——株式会社ブライア・コンサルタンツ(船着場)
施工——(大阪堂島浜タワー)株式会社竹中工務店
(堂島公園)西武造園株式会社
(堂島浜船着場)株式会社竹中土木
設計期間——2018年4月～2020年6月
施工期間——2021年10月～2024年4月
規模——(大阪堂島浜タワー)敷地面積：約3,571㎡
(堂島公園)約1,498㎡
(堂島浜船着場)約307㎡
主要施設——(大阪堂島浜タワー)植栽、園路、広場、ベンチ 他
(堂島公園)植栽、人工木デッキ、テーブル 他
(堂島浜船着場)PCセグメント式浮き 他

作品評

本作品は、大阪市の都市再生緊急整備地域内に建設された超高層の複合ビルの外構部分と、それに面する堂島川の水辺空間を対象とするランドスケープデザインである。
管理者の異なる民間・公園・河川の敷地をまたいで、水辺のにぎわいの創出と快適な歩行者空間の確保を目指すプランであり、それに伴う複雑な要件や調整すべき様々な課題に対して、応募者はそれらを乗り越えて基本計画から工事監理までの役割を一貫して担い、工事の完成につなげている。その努力を高く評価したい。
緑化の対象空間であるビルの外構部と堂島公園は、空間的にも制約が多く、デザイン面での苦労がうかがえるが、こうした中でも曲線を用いた歩行空間と選択された樹木で構成される静寂感のある散策の小径、高木の列植による緑の軸線の形成、透け感のある植栽と一体化したレストスペース、賑わい遊びの場となる公園空間を生み出しており、応募者の発想の柔軟性と対応力の高さが感じられた。
以上の点や応募資料の内容が評価され、特別賞に選出された。



堂島公園 「まちと川の賑わいを掬ふ水辺空間」

古くは堂島米市場が立地し賑わいを見せていた堂島川の水辺空間。再整備前の公園は、開放型喫煙所が設置され喫煙目的の利用者が多く、高さ約1.1mの護岸によって、川面への視認性が低く親水性が希薄であった。再整備にあたっては、多様な活動を生み出す多段状の施設配置により川への眺望を向上すると共に、対岸と見る・見られる関係性を持つ空間を形成することで、賑わいが周囲に波及する空間を目指した。公園内は、大阪府の補助金を活用した観光トイレ「kawamo」（当社設計）や大阪市整備による閉鎖型喫煙所も一体で整備し、都市のホスピタリティを高め、まちと川の賑わいを掬ふ、親水性の高い水辺空間として再生させた。

堂島浜船着場 「都市機能を拡張する舟運拠点」

近接する大江橋の桁下が狭く、潮位変動によっては船舶の航行が困難となる。こうした大江橋上流と下流の分断は、舟運を活用した防災・観光振興において課題となっていた。市役所や緊急輸送道路である御堂筋に近接する大江橋の下流側に、潮位変動に左右されないポンツーンを整備することは、陸路が寸断された場合においても舟運による物資輸送が可能になるなど、都市防災機能の向上に寄与する。
また、大阪堂島浜タワーに整備された宿泊施設や観光展望施設、陸路や公共交通との連携に適した立地を活かし、臨海部と大阪市中心部の舟運ネットワーク強化・拡大を通じ、新たな観光振興へ寄与することも期待される。



①花の広場リニューアル後全景 ②ハナモモ林から花の休憩所への見通しの確保 ③一緒に内緒話ができる花の伝声管
④花に空間にきれいな音が響く五感を刺激するような遊具の設置

愛・地球博記念公園花の広場リニューアル

日本工営都市空間株式会社

井上僚平・則竹登志恵・守田賢司・鵜飼麻子
樋口広汰（元職員）

愛・地球博記念公園は、愛知県が管理する県営公園であり、自然豊かな公園として多くの県民に親しまれてきた。2022年にはジブリパークエリアが開園し、国内外から多くの来園者が訪れている。本作品は、ハナモモの開花時期以外の利用が課題であった「花の広場」を対象に、1年を通して花を楽しむ集客力のある広場としてリニューアルしたものである。

花の鑑賞以外の新たな利用者呼び込むために整備した花の遊び場では、彩り豊かな花々に加えて、花や生き物をモチーフとした多様な遊戯施設を設置した。これにより、愛・地球博の理念である「自然の叡智」を継承し、身近な“花”を通して自然に慣れ親しみ、自然に目を向けるきっかけが生まれる場となることを目指した。また、子どもの心身の健全な成長につながるように、子ども達のコミュニケーションや集団遊びが発生しやすい仕組みや五感に働きかける空間づくりを行った。

作品概要

作品名—— 愛・地球博記念公園花の広場リニューアル
所在地—— 愛知県長久手市茨木ヶ廻間乙1533-1
発注—— 愛知県 尾張建築事務所
設計—— 日本工営都市空間株式会社
設計協力—— 公益財団法人愛知県都市整備協会、株式会社日比谷アメニス
監理—— 愛知県尾張建設事務所
施工—— 中部土木株式会社、大島造園土木株式会社、株式会社中京スポーツ施設、植芝園株式会社、岩間造園株式会社
設計期間—— 2021年7月～2023年3月
規模—— 1.2ha
主要施設—— 各種遊具、休憩施設、花壇、サイン、園路 等

作品評

愛・地球博記念公園は、愛地球博（2005年の国際博覧会）が開催された後に整備された広大な公園である。愛地球博が終了した後、この公園は一般市民に開放され、博覧会のテーマであった「環境保護」や「持続可能な未来」を象徴する場所となっている。「花の広場」は、ハナモモの開花期を除く1年のほとんどの時期において利用率が低いため、ハナモモ林の利用促進に加えて子どもたちが楽しめる遊び場整備を行った。視界や利用を妨げている高密度のハナモモ林を改善して来園者に開かれたシークエンス景観を形成し、通年利用できる花をモチーフにした「花の遊び場」を整備した。季節や流行に合わせて花の植え替えを行い、何度来ても楽しめる場づくりを目指して花の配色の考え方や植え替えの時期などを管理者と相談・共有を行って設計に反映している。作品は空間づくりを詳細に記述しているが、維持管理・運営についての論述にかけている。持続性ある公園とするためには完成後の管理運営が重要である。花の維持管理や花に関わる遊び、体験、学びのワークショップの開催等の利用を促進するための持続的な運営の記述がなかったのは残念であった。



①クリーンセンターの前に広がるたちむにいひろば ②敷地境界を緩やかに区切る築山群 ③賑わいが生まれる既存樹木の木陰 ④ワークショップ意見を反映した個性豊かな築山
⑤自然素材を活かした施設整備

立川市クリーンセンターたちむにいひろば

パシフィックコンサルタンツ株式会社

渡邊翔太・小野崎研郎・平本 圭・近藤 真（当時）

たちむにいひろばは立川市新清掃工場（クリーンセンター）の緩衝緑地である。計画段階から掲げられた「市民に開かれ、誰もが自由に利用できる緩衝緑地」となるよう公園のようなオープンスペースとして計画・設計した。

本ひろばの特徴は個性的な築山群である。築山は遊びや眺望、コンポストなど多様な機能を持ち、植栽や周辺景観と調和する配置とした。また緩やかな侵入抑制機能を持ち、周辺との一体性や解放感と夜間閉鎖の管理性を両立した。植栽は郷土種や暮らしと密接な有用木を選定し、樹名板には人の営みや地域との関わりに関する内容を記載することで環境教育の機能も取り入れた。さらに芝側溝やレインガーデン等のグリーンインフラを積極的に導入し、循環型社会の仕組みを広場内に体現した。

作品概要

作品名—— 立川市クリーンセンターたちむにいひろば
所在地—— 東京都立川市泉町2,002番地、昭島市もくせいの杜2丁目3番地
発注—— 東京都立川市
設計—— パシフィックコンサルタンツ株式会社
監理—— 東京都立川市、パシフィックコンサルタンツ株式会社
施工—— 吉川建設株式会社 東京支店
設計期間—— 令和2年10月～令和5年2月
施工期間—— 令和5年11月～令和6年8月
規模—— 約1.2ha
主要施設—— 芝生広場（約4000m²）、舗装広場（約2000m²）、外周部の多機能な築山、グリーンインフラ（芝側溝・レインガーデン等）、インフラ供給施設（クリーンセンターからの再生エネルギー供給設備）

作品評

本作品は、一般的には閉ざされることが多い清掃工場の緩衝帯を、市民が自由に使える広場空間として開放したもので、行政も含めて「新たな一歩」として評価したい。敷地中央の芝生広場を囲むように配置された連続した築山が大きな特徴となっている。この築山は、クリーンセンター本体工事で発生した残土を活用したもので、周囲からの侵入抑制という機能も緩やかに担っている。その他にも様々な手法を用いた雨水流出抑制や、既存木の保護・活用と郷土種の導入、循環型エネルギーの再利用、維持管理費の低減を目指した設計提案など、グリーンインフラの視点が十分導入・活用されていることも、今日的な視点と見え評価された。ただし、連続する築山に様々な機能や景観の特徴を持たせた点は大いに評価されたものの、選考委員会では同一形状で大小が違う築山を並べた手法について意見が集まり、ランドスケープ的な自由な表現への期待から奨励賞となった。

CLA賞の趣旨と募集・選考のあらまし

CLA賞選考委員会委員長 工学院大学教授 篠沢 健太

CLAはランドスケープ分野のプロフェッショナルが所属する団体であり、CLA賞は、「会員の優れた作品、優秀な業務を顕彰し、広く社会に紹介すること」を目的として設けられました。応募に際し、実施した業務をとりまとめてその成果や品質を再確認し、今後の業務へのさらなる展開につなげることが期待されていることは例年の通りです。

今年度も2025年5月1日から5月末日に「設計」「調査・計画」「マネジメント」の3分野の募集を行い、設計部門に8社10作品のご応募をいただきました。応募された皆さまに厚く御礼申し上げます。今後も、会員の皆さまには積極的に応募いただき、団体内のみならず広く社会に作品をご覧いただき、皆さまのより一層の研鑽の契機としていただければと思います。

今回応募された作品は設計部門のみでしたが、そのなかには、計画対象地の履歴や現況等について綿密な調査を実施し、多くの関係者との対話や調整を進め、その結果から全体計画や管理運営計画を取りまとめた上で、最終的に設計が完成した…という、全分野にまたがると考えられる力作が数多くありました。選考委員会では、今回の応募作品のこうした傾向について議論し、CLA賞の応募部門の在り方について、今後CLA全体で検討を進めていくこととしました。

本年度選考委員会は、CLA賞として最優秀賞1作品、優秀賞1作品、特別賞3作品、奨励賞2作品を選出しました。最優秀賞「ヌーヴェル赤羽台F街区のランドスケープデザイン」は、前述の応募部門に関する議論はあったものの、都内の団地の読み解き、再開発へのアウトプットなどが非常に高く評価されました。優秀賞「全国都市緑化かわさきフェア会場計画等実施設計及び植物監理」は、これまで「永続性」の観点から特別賞の受賞が多かった「都市緑化フェア」の会場計画のなかでも、応募作品は複数会場における連携と二期間開催などの新たな試みと、それに伴う複雑な課題解決に取り組んだ点が高く評価され、「優秀賞」に位置づきました。なお、この作品についても応募部門に関する議論があったことを付記しておきます。

また、社会的意義や技術的先駆性などから評価される「特別賞」として、「ニコン本社／イノベーションセンター」「皆春荘・旧松本剛吉別邸庭園 近代の小田原別荘文化の復元」「大阪堂島浜タワーランドスケープ 堂島川水辺空間」の3作品が選出されました。さらに、現在の社会のニーズに応え、これからの発展が期待される点から評価される「奨励賞」には、「愛・地球博記念公園 花の広場リニューアル」「立川市クリーンセンターたちむにいひろば」の2作品が選出されました。

惜しくも選から漏れた作品でも、長期にわたる異なる部門での取組みの成果が結実した作品もあり、応募部門の在り方について再検討が不可欠であることを実感しました。

毎年、ご応募頂いた作品には、社会的課題に真摯に取り組む

会員の姿勢が表れており、選考委員会は判断に悩む反面、全国でCLAの思いが詰まった空間・計画が着実に社会に生まれ育っていることをうれしく思います。

私が委員長を拝命しているここ数年申し上げている通り、CLA賞は、A4用紙1枚の「作品概要票」と、A3用紙5枚の「作品説明資料」、さらにA3用紙2枚までの「追加資料」のみで選考を行う、「コンサルタントとしての」審査です。出来上がった結果としての「作品」の良し悪しのみを評価するのではなく、「自らの提案をクライアントやユーザーとの議論のなかで練り上げ、それらを社会に正しく解りやすく説明する」コンサルタントとして業務遂行能力が評価の大きな部分を占めていると考えます。作品の社会的意義や技術的先駆性などを言葉で表現するのはもちろんのこと、受託者が託された課題をどのように把握し、課題解決のためにどのように提案を導いたのか？その内容を限られた資料の中に適切に表現することもまた、本賞の評価対象です。提出された資料をめくるたびに業務対応についての納得や判断に対する共感が得られるような作品説明資料を毎年強く望んでいます。

今後、応募部門のあり方について主催者として検討を始めますが、応募いただく会員の方々にもご考慮頂きたいと思います。

社会に対してランドスケープ・アーキテクトという職能をアピールしていくためには、良質なランドスケープ作品を世に送り出し、なおかつ社会に適切にアピールしていくことが必要です。CLA賞が単なる団体内部の顕彰制度にとどまらず、会員企業や技術者の皆さまの、ランドスケープコンサルタントとしての技術力向上につながることを願います。

以上、選考結果のご報告とさせていただきます。

作品の応募と選考結果

部門	応募	最優秀賞	優秀賞	特別賞	奨励賞
設計	10点	1点	1点	3点	2点
調査・計画	0点	該当なし	該当なし	該当なし	該当なし
マネジメント	0点	該当なし	該当なし	該当なし	該当なし
計	10点	1点	1点	3点	2点

選考委員会

委員長	篠沢 健太	工学院大学 教授
副委員長	内藤 英四郎	CLA 顧問
委員	宇戸 睦雄	CLA 技術委員長
委員	卯之原 昇	(一社) 日本造園建設業協会 資格制度委員長
委員	浦田 啓充	(一社) 日本公園緑地協会 常務理事
委員	片山 壮二	国土交通省 都市局 公園緑地・景観課 課長
委員	木下 剛	千葉大学大学院 教授
委員	佐藤 英介	全国1級造園施工管理技士の会 (一造会) 副会長
委員	塚原 道夫	CLA 広報委員長

2025年CLA賞 受賞技術者プロフィール

前川 和美 (まえかわ かずみ)

茨城県出身。建設コンサルタント会社を経て、2017年㈱総合設計研究所入社。CLA1部 プロジェクトリーダー。1級造園施工管理技士。現在は主として団地の外構計画・設計、公園緑地等の業務に従事

石井 ちはる (いしい ちはる)

東京都出身。明治大学農学部卒業後、㈱総合設計研究所に入社以来勤続、現在同社CLA1部部長。技術士(建設部門)、一級造園施工管理技士。造園学会賞設計作品部門、北村賞、品質工学会論文金賞などを受賞。ヌーヴェル赤羽台では様々な分野の多くの方々と協働できたことをこの場を借りてお礼申し上げます。

志村 勝 (しむら まさる)

1958年東京生まれ。1982年千葉大学園芸学部造園学科を卒業。同年㈱総合設計研究所に入社、現在に至る。公園及び集合住宅外構の計画及び設計に携わっている。代表作：越谷レイクタウン大規模調節池基本実施設計、葛西臨海公園改修設計、百合ヶ丘第二団地建替設計、豊四季台団地(第1期)建替設計など。

武田 栄文 (たけだ しげひさ)

1965年秋田県生まれ。1991年㈱総合設計研究所に入社。主として、公園緑地、集合住宅外構、自然環境の計画・設計に従事。主な業務：造幣局地区防災公園基本設計、吉祥寺の杜緑地ワークショップ運営、柏市篠籠田防災公園設計など。

立川 直樹 (たちかわ なおき)

1993年信州大学農学部森林科学科卒業、同年株式会社ライフ計画事務所入社。4年勤務後、退社し、18年間長野県松本市で農業に従事した。2017年より同社に再入社した。仙台フェア、かわさきフェアと全国都市緑化フェア業務担当が続き、現在は2028年度開催決定した佐賀フェア(仮称)関係の業務に従事している。技術士(建設部門・都市及び地方計画)

金子 隆行 (かねこ たかゆき)

川崎市出身。1983年に日本大学農獣医学部を卒業後、株式会社ライフ計画事務所に入社。2017年より代表取締役。全国都市緑化フェアの計画・設計は、千葉、山形、群馬、東京、仙台、川崎等に従事。CLA副会長、総務委員会委員長、(公社)日本造園学会理事、社会連携委員長、同関東支部副支部長、全国1級造園施工管理技士の会副会長

加藤 直人 (かとう なおと)

昭和61年東京農業大学農学部造園学科卒業、同年株式会社ライフ計画事務所入社。都市公園及び団地の外構の設計、監理、樹木調査などに従事。主な作品「多摩動物公園アジアゾウ展示施設実施設計」、「雑司ヶ谷公園拡張部実施設計」、「亥鼻公園日本庭園改修設計」など。好きなことは、車の運転(特に長距離運転)。一級造園施工管理技士

塚本 浩史 (つかもと ひろし)

1984年、日本大学農獣医学部農学科を卒業後、株式会社シーランド計画に入社。2023年ライフ計画事務所入社。全国都市緑化フェアの計画・設計は、群馬、川崎に従事。全国都市緑化かわさきフェアでは、富士見公園メインガーデンを担当。主に都市公園の計画、設計、施工監理に従事。

中村 葵 (なかも りあ)

2018年に日本大学生物資源科学部植物資源科学科を卒業、同年に株式会社ライフ計画事務所入社。

主に都市公園の計画、設計に従事。全国都市緑化フェアに携わるのは、仙台フェアにつづき、かわさきフェアが2回目。イラスト説明資料作成等を担当。

鈴木 綾 (すずき りょう)

1996年工学院大学建築学科卒。アトリエ事務所、組織事務所を経て、イタリマトリノの大学にて建築の修復・

保存、都市空間の有効活用について学ぶ。帰国後、2010年よりあい造園設計事務所に所属、現在同社取締役。公園を中心としたランドスケープ、まちづくりに関する計画・設計に携わっている。RLA/RCCM(造園)／認定都市プランナー(公園緑地計画)／一級造園施工管理技士

菊池 俊一郎 (きくち しゅんいちろう)

岩手県二戸市出身。2018年に東京農業大学造園科学科を卒業、株式会社あい造園計画事務所に入社。

主に公園設計業務に従事。全国都市緑化かわさきフェアでは、「アクティブデザイナー」として来場者がワクワクできる様々なシカケ作りの実現のため、企画・設計・施工監理に携わった。登録ランドスケープアーキテクト(RLA)

関根 千那望 (せきね ちなみ)

2023年武蔵野美術大学建築学科卒業。同年、株式会社あい造園設計事務所に入社。入社後は緑地や公園等

の計画及び設計に従事。全国都市緑化かわさきフェアでは屋外アート展示の提案等に携わった。

大瀧 英知 (おおたき ひでとも)

1973年、岩手県生まれ、岩手大学大学院農学研究科卒業。㈱総合設計研究所企画事業部兼東北

事務所長。公園計画、景観計画、植栽計画、復興まちづくりに関する計画、コミュニティデザイン、パークマネジメントに取り組んでいる。研究テーマは公園運営。技術士(建設部門・都市及び地方計画)

加藤 雄介 (かとう ゆうすけ)

2016年東北工業大学建築学専攻修士課程修了。建築設計事務所を経て、2020年に㈱総合設計研究所に入社。

入社後は、主に公園計画・設計業務に従事。東日本大震災の震災遺構、追悼公園の設計、全国都市緑化かわさきフェアの企画・設計に携わった。

大石 佳奈 (おおいし かな)

2019年に東北芸術工科大学デザイン工学部建築・環境デザイン学科を卒業。同年に総合設計研

究所東北事務所に入社し、地元である盛岡市にて勤務。入社後は主に東日本大震災の震災遺構、追悼公園の計画設計を担当。

小山田 和心 (おやまだ なごみ)

2022年MCL盛岡情報ビジネス&デザイン専門学校デザイン科建築インテリ

アコース卒業、同年有限会社岩手ハウスサービスに入社し、2年勤務。全国都市緑化フェアに携わるのは、川崎が初。秋会場、春会場の鳥獣パース・アイレベルスケッチを担当。

松榮 宏幸（まつえ ひろゆき）



1971年福岡県生まれ。九州産業大学芸術学部デザイン学科卒業。(株)総合設計研究所を経て2007年(株)三菱地所設計入社。主な業務経歴：「茅ヶ崎里山公園」、「三菱一号館広場」、「ザ・パークハウス晴海タワーズ」、「ホトリア広場」、「ホテルオークラ京都岡崎別邸」など。

朱 豊（しゅ ほう）



2018年京都大学大学院工学研究科社会基盤工学専攻景観設計学分野修士課程修了、三菱地所設計入社。現在、都市環境計画部プランナー。近年の主な業務として、「JAPAN SPORT OLYMPIC SQUARE」、「MUFG PARK」等ランドスケープ設計業務及び「Tokyo Torch Tower地下接続工事」等都市土木設計・監理業務に携わる。

大谷 育夢（おおたに いくむ）



2022年立命館大学大学院理工学研究科環境都市専攻建築都市デザインコース課程修了、同年、三菱地所設計都市環境計画部入社。近年の主な業務として、「MUFG PARK」、「グラングリーン大阪」、「TOKYO TORCH TOWER」等ランドスケープ設計・監理業務及び、「関内駅前市街地再開発事業」の都市土木設計業務に携わる。

手塚 一雅（てづか かずまさ）



1969年東京都生まれ。登録ランドスケープアーキテクト（RLA）、技術士（建設部門・環境部門）。(株)森緑地設計事務所を経て、令和元年に代表取締役として横浜に(株)CES.緑研究所を設立。文化財庭園の保存や計画・設計のほか、自然環境の保全や生物多様性などを中心に業務を広げる。全国の日本庭園を巡る計画を立てるもまだまだ先は長い。

手塚 悦子（てづか えつこ）



1971年横浜生まれ。(株)カーターアート環境計画入社。令和元年、(株)CES.緑研究所を設立。主に公園緑地等の計画・設計を担当。誰もが使いやすい過ごしやすい場所を目標とする。

福田 昌弘（ふくだ まさひろ）



1970年神奈川県生まれ。日本大学大学院理工学研究科（海洋建築）修士課程修了。1995年～2013年ゼネコンにて施工管理・意匠設計に携わる。2013年～株式会社建文。近年の主な業務として「松永記念館庭園整備」の設計・監理、「無住庵移築復元工事」の設計・監理、「富士屋ホテル改修等工事」の設計・監理など。

牧野 徹（まきの とおる）



1981年静岡県生まれ。日本大学大学院理工学研究科（建築学）修士課程修了。2007年～2011年世田谷区教育委員会民家関係、2011年～株式会社建文。近年の主な担当業務として「金沢八景権現山公園旧円通寺客殿復元工事」の調査・設計・監理、「三内丸山遺跡大型掘立柱建物改修工事」の設計・監理など。

西垣 和真（にしがき かずまさ）



1982年茨城県生まれ。2007年東京農業大学大学院農学研究科造園学専攻修了。(株)岩城を経て、2016年より三菱所設計。一般造園施工管理技士、登録ランドスケープアーキテクト。主な業務：JAPAN SPORT OLYMOIC SQUARE、高円宮記念JFA夢フィールド、虎ノ門アルセアタワー 等

名倉 良起（なぐら よしゆき）



2000年早稲田大学大学院修士課程修了、2008年三菱地所設計入社。現在、建築設計二部ユニットリーダー。ホテルや集合住宅などのホスピタリティ建築、木造木質化を中心とした環境建築を多く手掛ける。建築は街と人をつなぐもの、外部空間も内部空間も等価に捉え、永く豊かさが続く空間をつくらしていきたい。

尾杉 友浩（おすぎ ともひろ）



2006年大阪大学大学院工学研究科建築工学専攻前期博士課程修了、2016年三菱地所設計入社。現在、建築設計三部チーフアーキテクト。近年の主な業務として、複合再開発や国内外ホテルの設計に携わる。「地域に根付き、永く愛される建築」を目指し、建築主の夢や思いに設計者の強い意志を重ねて、新しい価値を生むことを心がけている。

石川 一平（いしかわ いっぺい）



2018年に立命館大学大学院修士課程を修了後、同年三菱地所設計に入社。現在はリノベーション設計部に所属し、大規模商業複合施設の改修や高速道路リノベーション業務などを担当。人々の記憶に残る建築を目指し、場所や建物の特性を最大限に活かす設計に取り組んでいる。

塚本 敦彦（つかもと あつひこ）



1969年生まれ。1995年京都大学大学院修士課程修了、1995年三菱地所入社。現在、三菱地所設計人事企画部長。主な業務 MUFG PARK、新宿イーストサイドスクエア、ふなばし森のシティ、大手町フィナンシャルシティグランキューブなど

近藤 卓（こんどう たく）



1998年早稲田大学大学院理工学研究科電気工学専攻修士課程修了、1998年三菱地所入社、現在三菱地所設計電気設備設計部ユニットリーダー。複合再開発、オフィス、商業、住宅、病院、工場等多岐な用途の設計に携わる。主な業務として、キラメキテラス、大手町フィナンシャルシティグランキューブなど

上田 早紀（うへだ さき）



2009年三菱地所設計入社、現在、三菱地所設計電気設備設計部チーフエンジニア。複合施設、貸事務所、金融機関、ホテル、学校等、多様な用途における設計監理に携わる。主な業務：ホテルオークラ京都 岡崎別邸、田町タワー 等

井上 僚平（いのうえ りょうへい）



日本工営都市空間株式会社 ランドスケープ・建築部。2009年立命館大学大学院修士課程修了。技術士（建設部門：都市及び地方計画）、登録ランドスケープアーキテクト、こども環境アドバイザー。ランドスケープに関わる計画・デザイン・設計・運営管理支援と幅広く奔走中。

鵜飼 麻子（うかい あさこ）



日本工営都市空間株式会社 ランドスケープ・建築部。名古屋造形芸術短期大学ランドスケープデザインコース専攻科卒業後、日本工営都市空間株式会社（旧玉野総合コンサルタント(株)）に入社。仕事・子育て・介護の三本立てで日々奮闘中。

守田 賢司（もりた けんじ）



1996年愛知県名古屋生まれ。2021年名城大学理工学研究科社会基盤デザイン専攻修了。同年、日本工営都市空間株式会社に入社。入社後は、東海地方を中心とした国営公園から街区公園を含む幅広い公園緑地を対象に、計画・設計業務に従事。また、住民参加型の公園づくりワークショップの運営にも多数携わる。

則竹 登志恵（のりたけ としえ）



日本工営都市空間株式会社 ランドスケープ・建築部。名古屋工業大学大学院卒。日本工営都市空間株式会社（旧玉野総合コンサルタント(株)）入社。技術士（総合技術監理部門・建設部門）、RLA。人とみどりが心地よく共存できる空間づくりを継続中。趣味は旅行とガーデニング。

樋口 広汰（ひぐち こうた）



福岡県出身。2020年福岡大学工学部社会デザイン工学科卒業。同年日本工営都市空間(株)に入社後、2023年まで在籍。公園や建築外構に係る計画・設計業務に従事。安全で魅力的な遊び環境に好奇心を抱き、日々公園を巡ってはこどもたちの遊び方や動きを観察し、設計に活かすことを楽しみにしている。

渡邊 翔太（わたなべ しょうた）



1992年神奈川県生まれ。2017年法政大学大学院デザイン工学研究科修了。学生時代は土木景観を学ぶ。中央復建コンサルタンツを経て2020年にパンフィックコンサルタンツ(株)入社。入社以来、主に公園・緑地、駅前広場、道路空間の計画・設計に従事。主な実績は長崎駅東口駅前広場、渋谷区宮益坂道路空間再編、室蘭市サッカー場等。

小野崎 研郎（おのざき けんろう）



1961年埼玉県生まれ。1987年東京農工大学大学院修了。環境中の水の挙動・汚染等について学ぶ。(株)日水コンを経て1992年にP社入社。環境アセス、環境計画に始まり、市民や事業者の参画による公共施設計画・整備に従事。主な実績は、練馬こどもの森、町田シバヒロ、岩槻にぎわい交流館、八幡平市地熱を活かしたまちづくり等。

平本 圭（ひらもと けい）



1973年福岡県生まれ。1997年千葉大学園芸学部緑地・環境学科卒業。協和コンサルタンツ株式会社を経て2006年パンフィックコンサルタンツ(株)に入社。主に公園、緑地などの計画・設計に従事。茅ヶ崎市柳島スポーツ公園、県立高田松原野外活動センター、札幌市GI検討等を担当。子供や高齢者が楽しめる特徴ある公園づくりを目指す。

近藤 真（こんどう まこと）



1993年和歌山県生まれ、2018年千葉大学大学院園芸学研究科修了。パンフィックコンサルタンツを経て公共R不動産へ。公民連携・空間評価・生態系保全・グリーンインフラなどをキーワードに、パブリックスペースの企画からデザイン、運営まで伴走する仕事得意です。お仕事のご相談・飲み会のお誘いお待ちしております！



GREEN × EXPO 2027 について

GREEN×EXPO 協会（公益社団法人 2027 年国際園芸博覧会協会）機運醸成部

はじめに

国際園芸博覧会の起源は 19 世紀に欧州で発展した園芸展示会である。第 2 次世界大戦後の 1948 年に欧州を中心とした民間の園芸関係団体により AIPH（国際園芸家協会）が設立され、1960 年にオランダ・ロッテルダムにおいて初の A1 クラスの国際園芸博覧会が開催された。国際園芸博覧会は AIPH の承認により開催され、A1,B,C,D の 4 つのカテゴリーに分類される。最上位の A1 クラスは BIE（博覧会国際事務局）の承認を受けることで EXPO（いわゆる万博）となる。日本では、1990 年に大阪市鶴見緑地で開催された国際花と緑の博覧会（大阪花の万博）がアジア初の A1 クラスの国際園芸博であり、B クラスとしては 2000 年のジャパンプローラ淡路、2004 年のパシフィックフローラ浜松がある。大阪花の万博は、政府の緑の 3 倍増構想や大阪市のまちづくり構想等を背景に、わが国の緑化の飛躍を目指して「自然と人間の共生」をテーマに開催され、2,300 万人が来場するなど盛況を博した。これをきっかけに、1990 年代にいわゆる園芸ブーム等が起り、花と緑豊かなまちづくりの進展や、産業振興に寄与することとなった。神奈川県横浜市で開催される 2027 年国際園芸博覧会（GREEN × EXPO 2027、以下 GREEN × EXPO）は、37 年ぶりに日本で開催される A1 クラスの国際園芸博覧会であり、大阪・関西万博の次に開催されるわが国 6 回目の万博である。

会場予定地（旧上瀬谷通信施設）について

GREEN × EXPO は、神奈川県横浜市の瀬谷区、旭区にまたがる旧上瀬谷通信施設（約 240ha）の一部、約 100ha で開催される。この場所は、戦前に旧日本海軍が買収し資材集積所として使用され、戦後は米軍に接収され通信施設として使用された。フェンスで囲まれた困障区域と民有地からなり、民有地では農業がおこなわれていたものの、米軍の電場受信基地としての役割から、電波障害防止地域として土地利用に厳しい制限がかけられていた。そのため大都市でありながら豊かな自然が残り、地域内で営農が継続されている。

2004 年の日米合同委員会において返還方針が合意され、2015 年に米国から日本に返還された。それを受け横浜市は地権者からなるまちづくり協議会とともに今後のまちづくりについて検討を進め、2018 年に土地利用基本計画を策定、計画地全域で市施行による土地区画整理事業を実施することとなった。土地利用計画においては、北側に物流地区、中央に観光・賑わい地区、南側に公園・防災地区を配置し、南側の公園を国際園芸博覧会の会場とし、博覧会の開催後はレガシーを継承する横浜市の都市公園として開設される。

GREEN × EXPO 2027 のテーマと理念

BIE 認定の万博においてはテーマが極めて重要である。1994 年の BIE 総会において、「全ての博覧会は、現代社会の要請に応えられる今日的なテーマがなくてはならない。」とされ、愛知万博以降の万博ではこの決議によりテーマの位置づけが明確になり、万博の目的は人類の課題解決であると整理された。

GREEN × EXPO におけるテーマ「幸せを創る明日の風景」は、横浜市の基本構想案において当初からメインテーマとして提示されていた。豊かさの再定義により、これまでの経済的な豊かさを主体とした対比的な充足から、自然との共生やシェアやつながりがもたらす幸福感を深めていく社会を目指し、心の豊かさである「幸せ」、空間・環境・時間が織りなす「風景」、次世代や未来の「明日」を重ね合わせたものである。

特に、キーとなる考え方として、プラネタリーバウンダリー（地球の限界）がある。これは、スウェーデンのヨハン・ロックストローム博士らが提唱した概念で、地球温暖化、生物多様性の喪失、自然災害の増大、海洋の酸性化などの 9 つの指標の内、現在 6 つの指標で既にその限界値を超えている状況の中で、どのように「幸せ」を作り上げていくのかが問われている。

そこで、NbS（Nature based Solutions 自然を活用した解決策）という考え方が重要になる。これは自然が有する機能を持続可能に利用し、多様な社会的課題の解決につなげるという考え方である。GREEN × EXPO では、地球環境の基盤である自然、植物への理解を深め、私た

ちもその一部として共に明日へと生きていくため、自然・人・社会が「共に持続するための最適解」を目指していく。特に、地球環境問題の代表的な課題である温室効果ガスの削減と生物多様性の確保については、2015 年に採択された気候変動対策に関する国際的な枠組みであるパリ協定において 2030 年がターゲットイヤーとなっている。生物多様性に関する昆明・モントリオール議定書においても、同じく 2030 年がターゲットイヤーである。GREEN × EXPO は、ポスト 2030 年に向けた議論が世界的になされるタイミングで開催される国際的なイベントであり、課題解決型の万博として多くの参加者や来場者にこれからの地球について考えるきっかけを与えるものとなる。

会場計画について

GREEN × EXPO 2027 の会場計画は、横浜市の公園計画と並行して進められた。計画にあたっては、横浜の丘陵地に位置し、中小河川の流域が南北に伸びるエリアに位置する会場の持つ地形・土壌の特徴や、相沢川や和泉川の流域としての水循環を細かく読み解くとともに、夏期の日中の南風が卓越する風環境の特徴を理解しながら、会場区域に残る既存樹木や市民の森との関係を踏まえた緑のネットワーク形成に配慮し、会場全体を回遊しながら対象地の環境を体感できるものとしている。

会場は北西と南東に 2 区分され、入り口ゲートを北西部 1 か所に設置し、その結節点に公園計画でパークセンターをそれぞれ整備し、博覧会のテーマ館、園芸文化館として活用することとし、主要施設を集約化した。さらに、

「Urban-GX」「Craft」「Farm&Food」「Kids」「SATOYAMA」の 5 つのコンセプトを展開し、各 Village のコンセプトに基づき企業との共創による新たなグリーン社会を示す世界観を作り出していく。

テーマ館は、横浜市の都市公園事業で整備されるパークセンター 1 を活用するもので、協会のマスターアーキテクトである隈研吾先生の設計監修による植物が成長するように CLT の木材を組み合わせた建築である。コンセプトを「全ての生命はつながっている。植物を中心に。」とし、最新の科学でわかってきた地球を支える命の根源である植物の真の姿を紹介する。



テーマ館外観



テーマ館屋内展示イメージ



会場計画図（2025年9月現在）

園芸文化展示はテーマ館と同様、横浜市が都市公園事業で整備するパークセンター2の建物を活用するものである。江戸時代を中心とした日本の園芸文化や、今や国外からも非常に人気のある盆栽をはじめ、日本を代表する文化の一つとなっている数々の伝統園芸植物を展示する。建物の外では江戸の植木屋・花屋敷を再現し、月ごとに展示植物を入れ替えてタイムスリップしたように江戸の園芸文化を体感できる。



園芸文化展示イメージ

政府出展は、2.5haに及ぶ区域内最大の出展である。旧上瀬谷通信施設の南東部にある和泉川の源頭部という極めて重要な場所の保全と活用の両立を図る。テーマは「日本の自然観を再考し、未来へ進む」であり、この和泉川流頭部の環境を読み解き、既存の樹木や在来植物を活用し、屋外展示では美しい風景としての「令和日本の庭」をつくりあげる。また屋内展示では、プラネタリーバウンダリーといった地球規模の課題に対して、どのような解決策があるか、最先端の農業技術による農と食の持続に向けた提案や、グリーンインフラ等を世界に発信する。



政府展示イメージ（提供：国土交通省・農林水産省）

出展計画について

GREEN × EXPO では、企業・団体出展として「Village 出展」「テーマ営業出店」「花緑出展」の3種類の出展形式を用意している。

「Village 出展」は、前述の共創事業 Village ごとのコンセプトに基づき、新たなグリーン社会を示す1000～3000㎡の区画からなる大規模な企業出展である。現在13企業・団体を内定している。

「テーマ営業出店」は、同じく共創事業 Village において、「幸せを創る明日の風景」の創出に資する、エシカル消費や食育などをテーマとした独自の飲食や物販等、企業・団体による出店で、現在4企業・団体を内定している。「花緑出展」は、庭園や花壇、生け花や盆栽、新品種・希少種など、多種多様な花・緑の作品を出展するものであり、屋外出展と屋内出展がある。造園会社、種苗会社、資材会社、花緑関連団体、大学、自治体など現在360団体が内定している。自治体については東京都をはじめほぼすべての都道府県、政令市が出展する予定である。

BIE 認定の万博として、GREEN × EXPO では70の国、国際機関の参加を目標としている。屋外出展 (Type1) と屋内出展 (Type2) の2種類があり、外交ルートにより出展勧奨を行っている。2025年5月に前回のA1クラスの園芸博を開催したカタールと初の契約調印式を実施した。さらに8月下旬に横浜市で開催されたTICAD2025において多数のアフリカ諸国からの参加表明を受けた。現在約60か国・機関から参加表明があり、引き続き出展勧奨に努める。

公式ロゴマーク

開催に向けた機運醸成を図るため、本博覧会の理念を表現できる公式ロゴマークを全国から公募し、1,204点の応募作品の中から、厳正な審査と選考を経て、公式ロゴマークを決定した。

デザインは、木の葉や花びらが重なり合い、私たちの暮らしに様々な幸福を積み重ねている様子を表現している。開催に向けて、本ロゴマークを積極的に活用することで、より多くの人々が認識し、今後も様々なシーンでの活用で機運醸成を図っていく。



公式ロゴマーク

©Expo 2027

公式マスコットキャラクター「トゥンクトウンク」

「トゥンク」は、心臓の音を表しており、心臓の音は胸に耳をあてないと聞こえないことから、「地球の声に耳を傾けよう、そしてみんなで手を取り合いつながって、たくさんの命あるものがときめくような、そんな地球になるように」といった思いが込められている。

「自然や地球との新たな関係を育むコミュニケーター」として、様々な機運醸成活動で活躍する。2025年3月には東京と横浜に初のオフィシャルストアがオープンし、トゥンクトウンクのグッズをはじめとする公式ライセンス商品の販売も開始された。



公式マスコットキャラクター
「トゥンクトウンク」
©Expo 2027

交通対策について

会場となる旧上瀬谷通信施設は、最も近い最寄り駅である相鉄線瀬谷駅からも2km離れているなど、アクセスが課題である。そのため、相鉄線瀬谷駅、三ツ境駅、JR横浜線十日市場駅、東急田園都市線南町田グランベリーパーク駅の4駅からシャトルバスを運行する予定である。会場に隣接して5500台の駐車場を確保し、加えて横浜市で土地区画整理事業での道路整備のほか、周辺の八王子街道の4車線化や交差点の立体化などの交通容量の確保を行う予定である。

おわりに

本年11月4日には、開催500日前を迎え会場計画や展示計画などの準備がさらに加速し、現場での工事も着々と進められている。開催一年前の3月には出展者に土地の引き渡しも行われ、出展に向けた工事も進められる。一都三県初の万博として、大阪・関西万博の盛り上がりを引き継いで着実に準備を進めており、引き続き多くの方々の参加、協力をお願いしたい。

GREEN × EXPO 2027の概要

博覧会種別：A1（最上位）クラス

テーマ： 幸せを創る明日の風景～ Scenery of the Future for Happiness ～

正式略称： GREEN×EXPO 2027

開催期間： 2027年3月19日（金）～9月26日（日）

参加者数： 1,500万人（有料来場者数：1,000万人以上）

出展国数： 70の国・国際機関

開催主体： GREEN×EXPO 協会（公益社団法人2027年国際園芸博覧会協会）

事業費： 会場建設費 約417億円 運営費 約360億円

GREEN×EXPO2027へのCLA出展について

1. はじめに

CLAは、横浜市における2027年国際園芸博覧会（以下園芸博という）開催決定を受け、ランドスケープコンサルタントとしての立場から、公益社団法人2027年国際園芸博覧会協会や関係機関、関連団体と協力し、国際的な園芸文化の普及や花と緑のあふれる暮らし、地域・経済の創造や社会的な課題解決に向けての、CLAならではの社会的発信が求められていることから、2023年4月1日に「2027年国際園芸博覧会特別委員会」を設置し、活動を本格化した。

現時点では、出展に係る基本的な考え方を取りまとめるとともに、具体的な出展内容について、各支部等との連携を図りながら検討を進めている。2025年末には、出展プランや運営プランの概要を取りまとめる予定であり、2026年秋頃までに詳細を取りまとめ、施工に入るスケジュールとしている。今後も様々な形で会員各社とともに出展へ向けての準備を進めて行きたい。

2. みどり業界における園芸博の意義

園芸博のテーマは、前項での紹介記事より「幸せを創る明日の風景（Scenery of the Future for Happiness）」であるが、私たちみどりの業界にとっては、最上位の国際園芸博覧会を契機に、以下の視点を展開することで、豊かで輝かしい「花き園芸・造園業界の未来」を目指すことが、大きな目標と言える。また、1,000万人を超える来場者へ向けて、花・緑の新たな可能性と明るい未来をアピールする千載一遇のチャンスと捉えることができる。

技：世界に誇る、日本の優れた花・緑の技術で会場を彩る

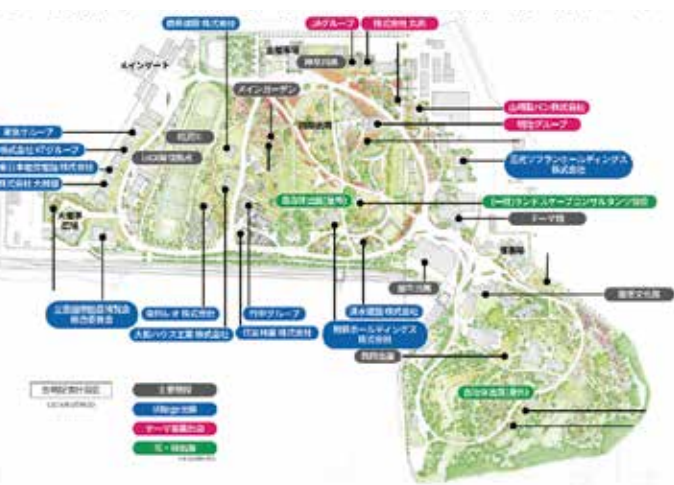
文化：伝統的なものから最新のものまで、日本が培ってきた花・緑の素晴らしい文化を発信

ひと：花・緑の世界に関わる機会や取組を披露する場を作り、花き園芸・造園業界の次世代の人材や幅広い世代のファンを育てる

社会：自然と向き合い寄り添う「産業」だからこそできる、地球の未来に貢献する知恵や技術を発信

3. CLAの出展場所

今回、CLAが出展する場所は図に示す通り、「キッズビレッジ」というゾーンに含まれ、全体の会場計画のほぼ中央に位置する。また、会場を縦断する主要動線に隣接することから、数多くの人の目に触れる機会が増大するものと考えられる。



詳細に見れば、2カ所の企業出展と自治体出展ならびに主催者展示に囲まれた場所であり、今後、こうした出展者との協議・連携も視野に入れる必要がある。



加えて、出展予定地には20mを超えるケヤキの既存樹が残されており、これを活用することにより、暑熱対策や各種のみどりの効果を具体的に体感できる場として活用でき、出展計画も既存樹の活用をテーマに検討を進めている。



4. 緑地曝露累積時間を用いたシステムの構築

現在CLAでは、こうした出展と同時に、「みどりの効果」について都市規模での施策評価の分析に役立つよう、「緑地曝露累積時間（CGSet：Cumulative Green Spaces Exposure Time）」を用いたシステムを構築し、公開するための検討を進めている。

世界保健機構（WHO）のレポートには、人々の生活圏における緑地の量や質、アクセスのしやすさを比較して、緑が人間に及ぼす効果を検証したものが多く含まれており、いずれの研究でも緑地への曝露（緑と触れ合う機会）が多いほど、そのWell-Being効果が大きいことを示している。

このため、ある都市における市民が緑と触れ合う機会や時間を求められれば、その都市における緑へのさらされやすさを数値化できると考え、緑への近接の程度を樹冠被覆率と人流データによって指数化しようとするのが本取組のねらいである。

・樹冠被覆率の算定

都市における全ての通りの緑視率は、Googleストリートビューから緑視率を算出することができ、まとまった敷地内については5mメッシュの赤外線衛星データから緑被率を算出することができる。

・人流データ

現在、24時間分のポイント型人流データが入手可能で、これは人が移動した位置情報を秘匿化・統計加工した位置情報ビッグデータで、男女別・年齢層別・データ取得時刻・計測地点の緯度経度・推定居住地等の情報で構成されている。

・木洩れ日指数（GAI：Green Accessibility Index）

先の樹冠被覆率と人流データによって、人が緑へ近接する程度を指数化することが可能となる。本検討では、これを木洩れ日指数（GAI）と呼ぶこととし、任意の場所や区域内における「人が緑にさらされる確率」を指数化したものといえ、樹幹被覆率30%以上の場所での人流ポイント数を、対象とした区域内の全人流ポイント数で割ることで算出している。

例えば、市域全域についてGAIを図化することも可能で、これにより緑地配置の現状評価や緑地利用者の属性分析、人流特異地点の把握とその場所におけるGAI向上策の検討、などを行うことが可能となる。

以下に、現在検討中のテストサンプルを紹介するが、場所は大阪市北区のグラングリーン周辺である。図中の囲った地域において、開園前と開園後の日曜日の人流を比較すると、人流が増えていることと、その属性分析から、歩行者が増えていること、女性の比率が高いこと、などが解ってくる。

開園前 2024.04.14 Sunday



開園後 2024.11.03 Sunday



本検討では、こうした分析システム全体を「緑地曝露累積時間（CGSet）」と呼ぶこととし、これにより「特定の区域において、人が1日にみどりに接する累積時間」を算出・図化することが可能となる。この手法を用いれば、都市レベルで市民のWell-Being向上に対して有効な緑の配置やあり方についての検討が可能となる。更には、「働く環境を重視するのか」「観光需要を意識した景観なのか」「居住者に優しい環境整備であるか」といった施策の多面的な方向性に対し、Well-Being向上という共通の基準で評価することができる。市民は、日常生活において街中でより緑に触れられる行動の選択が可能になり、都市計画者は人通りの多い街路を優先的に緑化する、あるいは緑化により人流を誘導する、といった緑に基づく効果的な都市計画が可能になると考えている。

みどりでまちが変わる、 人とつながる

一般社団法人ランドスケープコンサルタンツ協会

広報委員長 塚原 道夫

❖みどりは…

「みどり」は、植物（草木、樹木、花など）を主体とした空間を意味し、従来、次のような視点から論じられてきました。

- 大気の浄化、温暖化対策等の環境保全
- 景観形成
- レクリエーション
- 延焼の防止、災害時の避難場所等の防災
- 生物多様性の保護 など

❖みどりの新たな視点

今ではより多面的な視点から論じられます。

- 集いの場としての役割
公共の「リビングルーム」、世代間の交流
- 社会的絆の強化
協働の促進、地域イベントの場
- 安全な社会の基盤
安心感と社会的なつながり、子育て支援
- コミュニティ醸成
地域への帰属意識の醸成、無償の交流の場
- 健康促進活動の場 など

❖みどりとランドスケープ

このように高度化し、複雑さを増す現代社会においてみどりの意義は多様化しています。みどりは現代社会においてまちづくり、コミュニティ、市民生活等の重要な要素です。ランドスケープ職能は、多様化するみどりをデザイン、マネージメントすることによって、地域社会、市民生活に貢献しています。

「みどり」でまちが変わり、人とつながる ～青の国「普代」を事例に～

大瀧英知
総合設計研究所

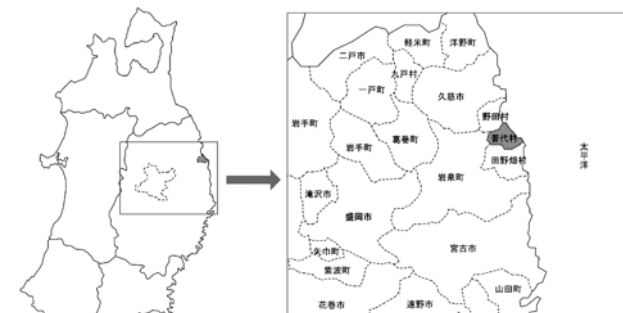
1. はじめに

私たちの暮らしはこの数年、コロナ禍を経てリモートワークが広がり、旅行の目的も「有名な場所を見ること」から、その土地で過ごし、学び、体験することへと移っています。

気候変動への不安や災害への備えも、日々の選択に影響を与えるようになりました。地方自治体は、人口減少や財政の厳しさと向き合いながら、どのように魅力を「つくり直す」のかが問われています。

岩手県普代村・黒崎園地（三陸復興国立公園の一部）は、こうした変化のなかで“みどり”の価値を再発見し、使い方を更新しようとしています。ここで言うみどりは、森や里山、海沿いの植生、そして手入れを続ける人の営みまで含む「自然資本」です。

普代村の黒崎を訪れると、霧の向こうから波の音が届き、湿った空気に草の香りが混じりました。その静けさの中で、環境がもつ回復力と、人の手入れが重なる場の価値が、迷いなく伝わってきます。景色を「消費」するのではなく、そこに参加しながら景色を「つくる」。そのようなことを思いながら今回のテーマである「みどりと人のつながり」を考えます。



普代村の位置

2. 普代の風景

黒崎園地では、断崖と入り江が連なり、潮風に鍛えられた常緑の葉が光をはね返します。霧が晴れると、黒崎

灯台の白と、遠くまで続く水平線が姿を現します。黒崎から普代駅（三陸鉄道リアス線）へ降りる道すがら、太田名部漁港や普代浜の静けさに出会います。普代水門は、暮らしと防災の近さを教えてくれる象徴的存在です。

園地の北側にはネダリ浜自然歩道がのび、黒崎漁港から海沿いのゴツゴツした岩場をたどって黒崎展望台へ上ることができます。晴天時は波打ち際の奇岩が続き、やませの季節には霧の動きを身近に感じます。周辺には北緯 40 度のシンボル塔、カリヨンの鐘、堀内駅や大沢橋梁、まついそ公園、夫婦岩など、歩いて出会える小さな名所が点在します。



黒崎周辺の海岸の風景

3. 社会の変化と「みどり」

社会の価値観は、量から質へと移っています。観光も、写真を撮って終わる消費型から、地域に関わり、その土地の人や自然から学ぶ参加型へ。行政には安全・安心とウェルビーイングの公共空間が、企業には脱炭素経営が求められています。

この流れの中で、みどりはより一層その機能を高めています。木陰は休息の場であり、森は学びの教室であり、海沿いの緑は風をやわらげ、眺望は心を整えます。自然の良さを楽しみながら、緑の力を暮らしや仕事に取り入れること、その再編のなかに普代の可能性があります。

具体的には、園地の木陰で読書をする時間、普代浜の朝の光、漁港で地元の方から魚やわかめの話を聞くひとときが、来訪の価値を高めます。歩いて届く範囲に多様

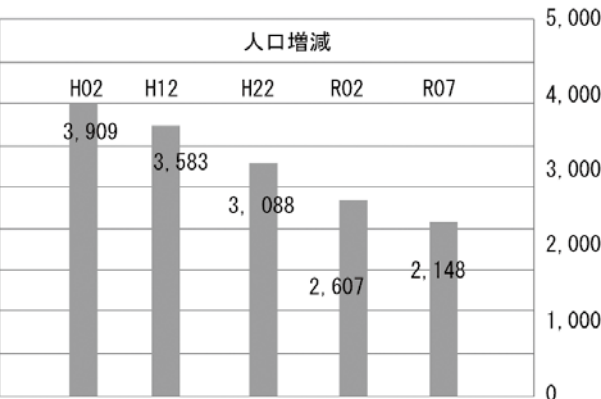
な体験がぎゅっと詰まっていること。それが普代の強みです。

4. 普代村の課題

普代は人口約 2,500 人で、少子高齢化が進み、担い手不足は喫緊の課題です。一方で仕事場の少なさ、安定した雇用が生まれにくいことも現実です。

また、公共施設の維持管理費の増大から交通を中心としたインフラ整備も十分とは言えず、観光の受け入れに制約が残ります。

しかし、これは裏を返せば、改善の余地が大きいということでもあります。普代駅前のスペース、普代浜、黒崎園地といった既存の資産をていねいに組み直し、小さく始めて続ければ、成果が着実に積み上がると考えられます。みちのく潮風トレイル沿いにベンチ、手すりを点々と置くだけでも、滞在の質は上がります。



普代村の人口増減の動き

5. まちがみどりで変わる道筋

第一の柱は、黒崎を核にした滞在拠点づくりです。いきなり建て替えではなく、既存の建物を活かしながらランドスケープデザインを進めます。基本は「引き算の景観形成」。視界をさえぎる老朽建造物の撤去や電線の地中化、標識・サインの統一など、シンプルな空間にすることで、もともとの資源を際立たせます。必要最小限の“足し算”として、Wi-Fi 環境、屋外のデッキ、焚き火ができる小さな場を計画しました。

園地内の重点箇所は、くろさき荘入口、黒崎展望台、潮風トレイル、黒崎灯台周辺、ネダリ浜、キャンプ場、くろさき荘本体の 7 点にしぼり、動線の明確化と休憩の質の向上を図ります。デザイン・コードは「海（青）・雲（白）・樹林（緑）」を基調に、園地全体の印象を整えました。

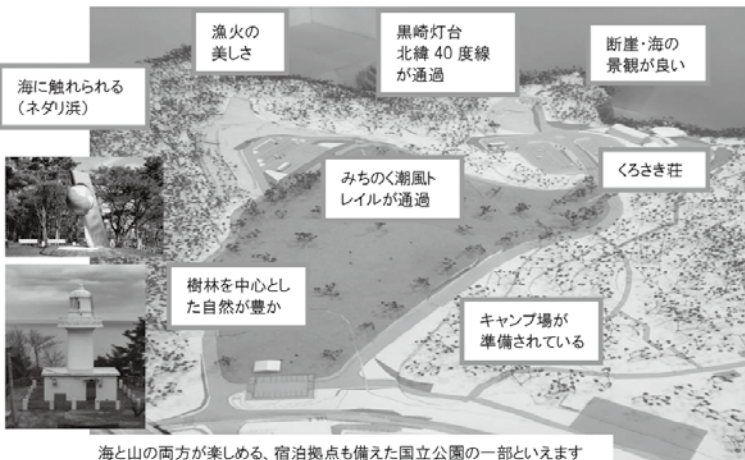
6. 海から山へつなぐ

第二の柱は、海から山へ続く“みどりの回廊”を歩ける適度な距離感でつなぐことです。黒崎の海岸林から海食崖、谷筋の沢沿い、山の縁、と段階的に結びます。眺望を楽しめる“抜け”を確保しつつ、倒木や土砂のリスクを減らす整備を計画的に進めます。

みちのく潮風トレイルは、黒崎―田野畑・北山崎へのルートになっており混雑を回避しています。普代浜から野田・十府ヶ浦海岸へ向かう緩やかな散策道も季節の花を楽しむ人に適しています。

7. 学びの観光

第三の柱は、震災の記憶と自然の知恵を次代へつなぐ学びのプログラムです。例えば二泊三日の標準コースでは、初日は海岸林の手入れと海の安全、二日目は普代駅から村内を歩き、普代漁港や普代浜で暮らしの声に触れ、三日目は森の香りを抽出しながらカーボン・オフセットを学びます。これらの運営は“着地型観光”の考え方により、観光協会、商工会、漁業組合、NPO、旅行会社、行政が緩やかに連携し、ワンストップで受け入れます。地域住民主体の組織に資源が集まり、地域資産として再投資される循環をつくります。



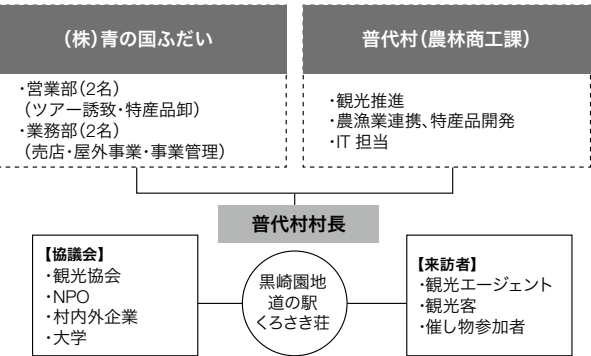
エリアのポテンシャル

8. 人をつなぐ仕組み

3 つの柱を整えたら、人をつなぐ仕組みを構築します。その仕組とは地元組織の「株式会社青の国ふだい」が関わります。

利用のルールを明示し、サインとウェブサイトで“歩きながら学べる展示”へ再配置します。ブランドは「青の国」を基調に、メディアの表現を揃えます。一方で、地域のブランド構築は“ベクトル合わせ”から。関係

者間で「ブランドとは何か」「目的は何か」を共有し、PDCA で磨きます。近隣の田野畑（北山崎、鶉の巣断崖）や野田（十府ヶ浦海岸）と普代を潮風トレイルで結ぶことで機能を発揮させていきます。



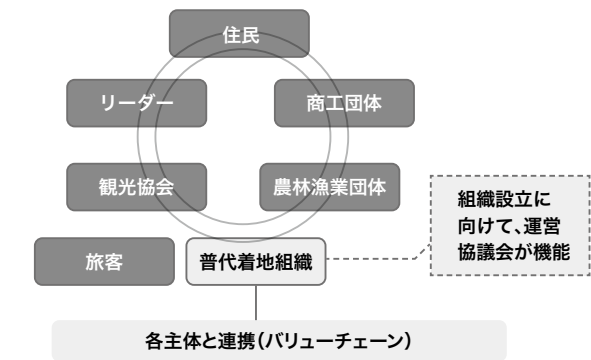
黒崎園地・道の駅・くろさき荘の経営組織図

9. 運営の考え方

資金調達初期の整備はクラウドファンディングや企業版ふるさと納税を想定しつつ、委託事業で捻出。将来的にはカーボン・クレジット等で企業が自走度を高める設計にしていきます。

使い道と成果はホームページで見える化し、外部監査で信頼性を担保します。運営主体は「青の国ふだい」を中核に、観光協会・商工会・漁協・NPO・民間事業者・行政が結ぶ体制を作ります。

営業と現場運営の機能を分け、着地型の商品造成と品質管理を両輪にします



運営の考え方

10. 進め方

一年目は既存資産の再編集と二つの標準プログラム（周辺のハード整備、震災の語り部）の試行。二年目は企業合宿の受け入れ、海岸林更新とトレイル安全対策の標準化。三年目は広域連携を進め、“みちのく潮風トレイル”沿線で連携を形にします。今後は、整備と運営を

小さく回しながら、季節ごとの学びを積み上げます。

P	STEP1:組織作り、ベクトル合わせ ブランド構築の組織づくり ブランドに関するベクトル合わせ
	STEP2:地域の現状分析 地域イメージ ブランド力 地域の強み 地域資源の魅力度測定
	STEP3:ブランド・アイデンティティの構築・共有 ブランド・アイデンティティ(目指すべき地域像)の構築 ブランド・アイデンティティの共有化
	STEP4:ブランド戦略の実行 ブランド要素(ロゴ、ウェブサイト、ポスターなど)の作成 統一性、一貫性のあるコミュニケーション
C	STEP5:ブランドの評価・モニタリング 理想と現実のギャップ把握 観光客満足度調査 居住者満足度調査など
A	STEP6:ブランドの磨き上げ ここまでのステップを循環させたブランドの磨き上げ

PDCAサイクル表
(出典:岩崎邦彦「観光ブランドの教科書」日本経済新聞出版社、2017年)

11. おわりに

普代では“みどり”を景色ではなく〈自然資本〉として再編集しました。黒崎園地の引き算の景観形成、海から山へつなぐ回廊、震災の記憶と自然の知恵を学ぶ着地型プログラム――三つの実践を「青の国ふだい」の運営で回し、ベクトル合わせと PDCA で磨き上げています。

その結果、断崖の眺望やトレイル、灯台周辺の統一感のあるランドスケープデザイン、これに住民と来訪者が手入れや学びに参加することで小さな資金の循環が生まれました。海と山、記憶と食、学びと仕事、暮らしと旅が触れ合い重なり合う“密度”が、歩いて届く範囲で体験できるのが普代の強みです。

みどりは飾りではなく暮らしの基盤。季節のうつろいが暦となり、手入れが学びとなり、集いが仕事につながる。

この循環を次世代へ手渡していくことで、“みどり”でまちが変わり、人がつながり続けています。

シンボルプロムナード公園「花の広場」ナチュラリスティックガーデン (東京都江東区有明 都立海上公園)

平工 詠子
GARDENER - 詠 -

幼いころから植物に親しみ、まちなか緑化の取り組みに触れてきた経験から、“生活の中で触れる緑”が人と人、人と自然をつなぐ大切なきっかけになると感じてきました。現在は東京都江東区の都立シンボルプロムナード公園「花の広場」に携わり、公園管理者である東京港埠頭株式会社から委託を受けて、ナチュラリスティックガーデンの植栽デザインや植栽管理の監修、ボランティア活動の講師を担当しています。本稿ではその取り組みをご紹介します。

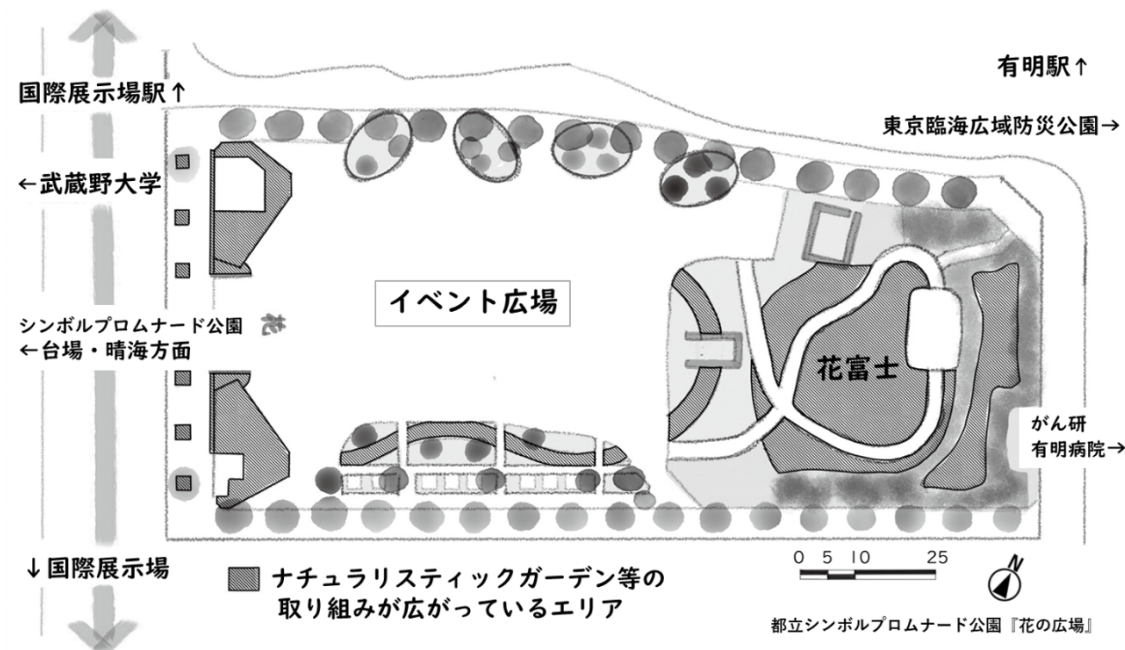
花の広場 — 有明の玄関口を彩る空間

東京都江東区の臨海部に広がる都立シンボルプロムナード公園。その東端に2020年3月「花の広場」がオープンしました。面積はおおよそ1ヘクタール。国際展示場駅から東京ビッグサイトへ向かう動線に面し、多くの来訪者の目に触れる立地にあります。「花」をテーマに彩り豊かな植栽によって有明地区の玄関口にふさわしい景観をつくりつつ、イベント開催時には多くの人を迎え

る広場として機能する。その両立を目指して計画されました。

とりわけ2020年春のオープン時は、夏に開催される東京オリンピックを控えている想定でした。花の広場は、大会の雰囲気を感じられる象徴的なエリアとして装飾される「オリンピックプロムナード」として位置づけられていた公園の一部でもあり、国内外の来訪者やメディアの拠点と隣接する立地。「花を主役に、ボランティアとともに育てる修景」という東京都の方針に加え、花壇としての華やかさを備えながらも、ニューヨークのハイラインのように、都会的で整った景観の中に自然や多様性を感じられる、新しい植栽でこれからの時代にふさわしい広場空間を育むという公園管理者の構想がありました。その対比によって、訪れる人々に新鮮な感覚と季節ごとの気づきをもたらそうという方向性を共有しました。

こうした意図のもとに、花の広場の植栽は「自然らしさ」を軸とした方向へ展開し、ナチュラリスティックガーデンの導入につながっていきます。



花の広場の植栽エリアとナチュラリスティックガーデンの広がり

自然らしさを育むデザイン — 都市に芽吹く新しい風景

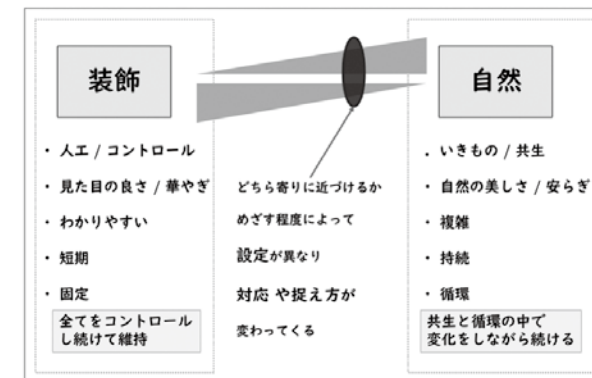
植栽デザインに求められた、華やかさだけでなく「自然らしさ」を取り込むこと。それは都会の喧騒のなかで人々が無意識に「居心地の良さ」を感じ、自然との距離を縮められる場になると考えました。草花の彩りは関心を引き、自然の存在意義に気づききっかけとなります。「ナチュラリスティックプランティング」と呼ばれるこのスタイルは、自然の植生や風景から学び、植物の生長や移ろいを活かします。花の時期だけでなく、種を付けた姿や冬枯れのようにすまでも風景の一部とし、ありのままの自然な姿が楽しまれています。

オープン当初は植栽に華やかさが重視されていたため、彩豊かな一年草を多く取り入れつつ、日本らしさを感じる在来種やグラスなども組み合わせたナチュラルなデザインが見える形でスタート。時間の経過とともに多年草が定着し、2、3年後には自然らしさの割合が増す風景へと変化していきました。広場を利用する人々の感覚もその変化に慣れ親しみ育まれていったように思います。コントロールを最小限にした植物たちの自然な共生の風景では、草花が風に揺れ、朝夕の光を受けて透ける姿に心を大きく動かされます。いつの間にか虫たちの音もたくさん聞こえ、埋立地でありながら自然のリズムが息づくようになりました。こうした体験は無意識のうちに人々に「自然の恩恵」を気付かせ、人間らしさの回復や心の癒し、さらには地球の健康への意識を育むきっかけとなっていると感じています。

植物はいきもの — 変化を受け入れるデザインと管理

(1) 順応的な管理の考え方

花の広場では作り込まれた「自然らしさ」を固定的に守るのではなく、自然の摂理を受け入れる植栽管理を基本としています。草花主体の植栽でも植物は人が完全にコントロールできる存在ではなく、環境に応じて競争し



植栽計画の際に「装飾」的に対し、「自然」の変化をどの程度いかしていくかそれぞれの特徴を想定して検討した

群落を変化し続けます。逆に言えば、当初のデザインをそのまま保つには高い管理圧と労力が必要で、その結果、管理が行き届かず望まない姿になってしまう様子は多くの場所で見られるように思います。

(2) 変化を受け入れる実践

例えば、施工直後に旺盛だった草花も、数年で湿地化が進み衰退するエリアがありました。一年草花壇の場合は年に1、2度耕して一時的に環境をリセットすることもあります。ここでは環境を変えて抗うのではなく、湿った環境を好む植物を試して場所の特性を活かす方向に転換しました。また、地下茎で広がる種や、競争に強い／弱い種など、群落は常に動きます。その変化を「当たり前」と捉え、広場利用者に受け入れられやすいポイントで手入れをします。時間を味方につける視点が必要であり、実践を通じて変化を楽しみ、学んで、活かすことがこの場所を持続的に育む方法だと感じています。

(3) 管理の基本方針

よく「どうやって共通認識を持って管理しているのか」と聞かれるため、ここでの基本の考え方を紹介します。前提は植物は「いきもの」であるということ。管理は「自然の変化を受け入れつつ、鬱陶しさを取り除く」ことを軸にしています。次の3つは、心地よさと自然の動きのバランスを探るための育成管理のポイントです。

- ① 鬱陶しさの排除：人に伝わるわかりやすさ
- ② 早めに対応：時間軸で変化を想定
- ③ 自立を目指す：植栽構成と最小限の手入れ

(4) 自然の力を活かす 3つのポイント

花の広場では、なるべく人為的な介入を少なくし、自然の力で植物が生きていくことを目指しています。

- ① 灌水：植付時に重点的に行き、その後は原則任せ。猛暑時など極端な渇水時のみ景観維持の範囲で補う。
- ② 施肥：基本は行わない。剪定した草や花を刻んで地表に敷き、土壌動物による分解を促す。景観的に必要な場合のみ冬季に有機肥料を限定的に施す。
- ③ 雑草：不要なものだけ選択的に除草。刻んで敷いて乾燥防止にも役立てる。景観を助ける野草は活かす。これにより、人為的な介入を減らしながら植栽が自立し、徐々に土壌も豊かに育ち、炭素の固定にもつながります。

(5) 人材育成と順応的管理

植栽管理のタイミングや方法は、目標や季節・環境によって異なります。そのため観察・実践・考察を繰り返し、時間をかけて身に着けることが大切です。花の広

ドラマチックな季節の変化



春の芽吹きとチューリップの華ぎでスタート



晩夏の華やぎと形、徐々に秋の深みが増してゆく



冬姿の様々な茶色と形、冬ならではの風景

場ではこうした経験の積み重ねにより、スタッフ自身が判断力を養い自らが主体で管理を進められるようになってきました。順応的管理は単なる効率化ではなく、植物や土壌を「いきもの」として尊重し、人と自然の共生を育むことにつながる試みです。植栽管理に携わる専門スタッフは、長く携わるほどに対応力が増し、やりがいを見出して管理を進めていることを実感しています。

だれでも参加 OK！花の広場ガーデンボランティア ― 自然を軸に広がるつながりの場

花の広場の植栽ボランティア活動は、コロナ収束後の2022年秋にスタートしました。活動は月に2回、平日と週末に行われています。固定メンバーを設けず、「いつでも、だれでも参加 OK」というオープンな形式をとっているのが大きな特徴です。近隣の方から都内、そして遠方からの参加者まで幅広く迎え入れています。中には中学生が夏休みに親子で体験に訪れることもあれば、江東区内や他地域のコミュニティガーデンに携わる方が交流の場として参加することもあります。初めて植物に触れる人から、庭の手入れを仕事にしている専門家まで、多様な人が集まることで、活動のたびに新しい出会いが生まれています。私も月に1回講師として携わり、植栽の見方や手入れの考え方を伝えながら、共通の視点で一つのガーデンを育てていくことを大切にしています。

活動の一番の魅力は、自分たちで手入れをしたガーデンが、次に訪れたときに驚くほど元気で美しい姿を見せてくれることです。その瞬間に参加者同士で「わあ！」と感動を分かち合えるのは何よりのご褒美です。特に夕陽が草花を金色に照らす時間「キラキラタイム」と呼ん

でいるひとときは、だれもが足を止めてしまうほど印象的で、活動に参加したから味わえる特別な体験。活動後に「楽しかった!」「また来たい」と声をかけ合えるのも、自然を軸にしたこの場ならではの喜びです。

遠方からの参加者の中には「ナチュラリスティックガーデンの手入れを実際にやってみたい」「説明を聞いて学びたい」という声もあります。活動はまず初参加者の自己紹介から始まり、その日その時の植栽の「今」を一緒に観察。そこから季節ごとの特徴に合わせて手入れを実践していきます。通行する人の視点を意識して、参加者からの意見を取り入れながら進めるのも特徴です。「訪れるたびに風景が大きく変わっていて、その変化を見るのが楽しみ」という声はとても多く、参加動機の大きな柱になっています。

休憩時間や週末の午前活動の後には、有志でランチを食べたり植物や日常のことを語り合う時間もあります。作業の合間に交わされる何気ない会話がきっかけで参加者同士の距離がぐっと近づいていくのも、この活動の楽しさの一部です。オープンな形式で誰でも参加できることが魅力である一方、固定メンバーがいないためにつながりが深まりにくく主催側主導になりやすいという課題もあります。しかし、継続的に参加する人が少しずつ増える中で自分ごととして活動に関わり始め、提案や工夫を持ち寄る人も現れるようになりました。新しい参加者が常に加わり続けることと徐々に主体性が育っていくプロセスは、従来のボランティア活動とは異なる「新しい形」といえるでしょう。

また、年に一度は隣接する東京臨海広域防災公園のナチュラリスティックガーデン講座と合同で見学会を行っ

ています。進め方や見せ方の異なる植栽を共に体感することで、関わる人たちの学びや交流の機会となっています。情報発信では、Instagramで活動の様子や季節の植栽をタイムリーに発信することで、参加ができなかった人たちと「今のようす」を共有することにつながっています。「こんな活動があるなら参加してみたい!」と新たな人を呼び込むきっかけにもなっています。



夕陽が広場と植物を輝かせ、感動あふれる「キラキラタイム」
この時間を楽しめるように季節によって活動時刻を調整

みんなで考える、花の広場のこれから ― 人と緑をつなぐフォーラムから

花の広場の活用が進むなかで、新たな課題も見えてきました。広場の緑は、一年草の華やぎを演出する「花富士」、「ナチュラリスティックガーデン」、その他の緑地によって構成されていますが、それぞれが分断され広場全体の連続性に欠けていました。また、イベント時には賑わいを見せる一方で、日常の利用は少なく、多くの人にとって「通り道」として流れてしまう空間にもなっていました。

こうした現状を共有して、未来への方向性を探るために「花の広場フォーラム2024～100年先の種をまこう!」(主催:東京港埠頭株式会社)を開催しました。緑の業界関係者、まちづくりや地域コミュニティに携わる人々、広場の利用者など64名が参加。現地を視察しながら「足を止めずに通り抜けてしまう人が多いのはなぜだろう」といった気づきも交わされ、課題を自分ごととして体感する時間となりました。

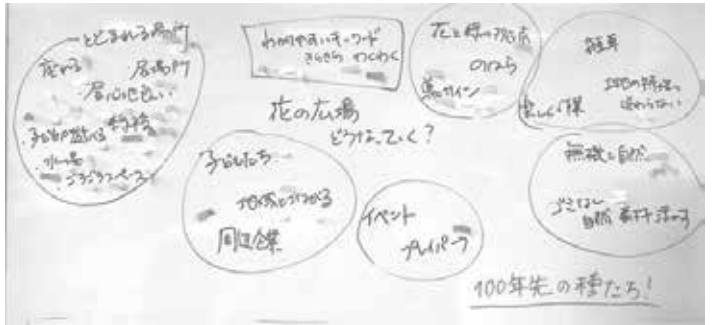
その後の講演では、花の広場で実践していることをお伝えし、建築家の中山佳子氏から公共空間を自分ゴトにするまちづくり視点のポイントを事例を通して学び、近隣の武蔵野大学の明石修准教授からは、地球の健康＝人の健康であり、人がつながり地域全体と生態系がつながること、自然に倣うことの大切さを学びました。普段

の活動では聞けない専門的な視点での広場活用の考え方に、一同熱心に聴き入りました。

続くグループディスカッションでは、「木陰で休める場所が欲しい」「子どもが遊べる余白があるといい」といった具体的な意見が飛び交いました。「居心地の良さがあれば、ここに立ち寄りたくなる」「花の広場らしい認知を広げたい」など、正に「自分ゴト」の活発な議論があちこちで繰り広げられ、会場は笑顔と熱気にあふれていたのが印象的でした。

また、別の機会に行ったボランティア参加者との勉強会では、「ベンチはあるけれど花のそばで座りたい」「ゴミ箱が整えば、もっと気持ちよく過ごせる」といった公園利用者ならではの生の声が多く集まりました。

こうした対話の積み重ねを通じて、花の広場が地域や生態系とつながる拠点の一つになり得ることを多くの人たちと発見し、共有されました。そして次のステップとして、広場全体の連続性を高め、日常の居心地の良さを向上させる工夫へと展開していく方向性が見えてきました。



グループディスカッションの各班の代表的な意見のとりまとめ



初めの現地見学。「草の丘を駆け回りたくありませんね」などの声がありました。



8班に分かれたグループディスカッション。班ごとの個性もあり、沢山のアイデアが共有されました。

広がる取り組み ― 拡張と循環のはじまり

フォーラムでの意見を踏まえ、広場では新たな展開が始まっています。

まず、国際展示場駅と東京ビッグサイトをつなぐ動線と広場のメイン入口の間には、開設以前からの高木列植が残されており、景色と人の流れを分断していました。

そこで6か所の植栽柵から高木を隣の広場に移植し、草本類を主体としたナチュラルスティックな植栽へ転換。植栽柵自体はそのまま残しつつ、風に揺れるグラスと彩り豊かな草花が広場全体の雰囲気とつながりました。視界が開けて草花が自然に広場内へ誘導するエントランスへと生まれ変わりました。

続いて「花富士」エリア(約900㎡)では、一面を彩っていた従来型のペチュニア/パンジーによる花壇型植栽を、ナチュラルスティックガーデンへ改修する計画が進められました。2025年3月に実施されたプレ施工の一部はボランティア活動の拡大版として実施。午前・午後あわせて延べ100名が苗の配置や植付活動に参加しました。自分たちの手でつくったことで花の広場に「身近さ」が生まれ、その後の活動参加者も増えてきました。手入れやイベントのアイデアが出やすくなり、「秋の景色を花束に」という企画も自主的に生まれるなど、主体性の高まりも実感されだしています。



高木移植前 広場が分断
高木移植後 広場と動線につながる



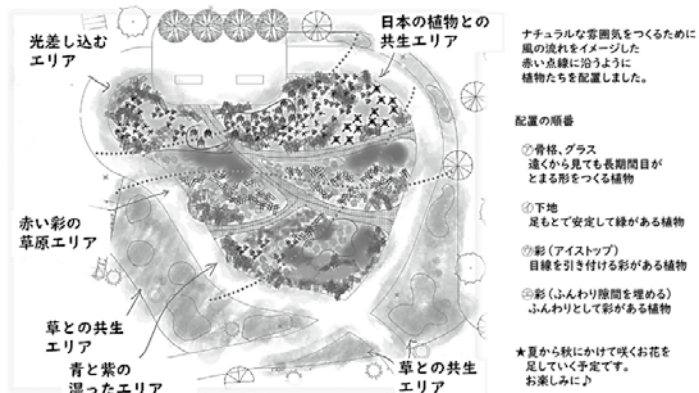
新しいガーデンを自分たちでつくる。仕上げは夏のキラキラタイムを演出するキンエノコロの種まき

花富士の植栽はグラス類で風の流れをつくり、そこに季節を塗り替えるように彩る一年草と多年草を色彩ごとにエリア分けをして入れています。新たな取り組みは荒川流域の地域性な在来種のナキリスゲや、雑草としての認知が強い一方、美しい穂が見られる在来種のカゼクサの活用。園芸種のみならず身近な植物を活かして楽しめる植栽を試みています。

管理の方法も工夫されています。耕さずに既存の土壌

●ナチュラルな草花になった花富士エリア

奥の林のエリアから花の広場全体がつながるように、この花富士エリアもナチュラルな雰囲気へ。風にたびくグラスや一年草をメインに、野原のように、彩り豊かな場所をみんなでつくっています。人も虫たちも喜んでくれる場所になっていきますように・・・。



ナチュラルな雰囲気になった花富士植栽のエリア図。こどもたちも親しみやすいように赤青黄のメインカラーのエリア花壇がある。



生まれ変わったナチュラルな花富士エリアからの眺望。広場の緑と草花が一体化して周りのビル群とつながる。視覚的にも体感できる風の動きが心地いい。



野草を意図的に生かしていることを公園利用者に伝える参加者手づくりのメッセージ看板

や雑草を生かす方法、腐葉土や人工軽量土壌、出てくる雑草をマルチに用いる方法など、複数の手法を施しながら、景観の質と管理の省力化を探っています。晩春に一面に輝くオランダミナグサのカーペットは、みなが驚く美しい光景でした。さらに不要となった高木支柱を園路柵に再利用したり、周囲の剪定枝を組み合わせてアートにもなる虫たちのすみかを活動でつくるなど、資源を



公園内で伐採された幹を活用した「虫たちのすみか」隙間には手入れで出た草花を差し込んで「可愛さ」「楽しさ」もプラスされた。

循環させる工夫も進められています。

新たに植えられたキャットミントの花々には、おそらく武蔵野大学の屋上ガーデンからやってきた多くのミツバチが訪れています。花壇が単一の草花から多様な種類の草花へと変化したことで、昆虫の種類が大幅に増加したことも確認されました。花富士エリアは今後、子どもたちも参加しやすい活動の場としても発展が期待されます。

一方、有明駅側入口周辺では、移植された高木が健やかに育たず、印象があまり好ましくない区画がありました。ここでは不要な支柱や枯枝が整理された後、ボランティア活動日に有志が集まり、剪定枝や落ち葉を積み重ねた「バイオネスト」をつくりました。広場内の手入れで出た植物残渣をその場に還元して土壌を豊かに導くなど、環境が回復しながら豊かな緑が育まれることを目指した活動が始まりました。この「森づくり活動」(仮)はまだ始まったばかりですが、花の広場における生態系の循環を支える学びの拠点となることを期待しています。

いずれの取り組みにも共通するのは、「参加」と「楽しさ」を軸に据えていることです。自然味あふれる緑が広場内の一部から全体へ広がり、やがて外部へとつながっていく。そのプロセスは現在も進行中であり、まさ



広場周辺のクスの剪定枝を活用したバイオネストづくり。花富士の手入れで出た植物残渣を分解させ、森づくり活動で活かす。

に人と自然の循環を学び合う場となっています。

花の広場から発信する「ネイチャーポジティブ」

花の広場で進めてきたフォーラムや花富士エリアの改修は、東京都が推進する「トウキョウ・フローラル・パサージュ事業」の一環として実施されました。臨海副都心エリアを「国内最大級の花回廊」として整備するこの事業は、国際的な来訪者を迎える玄関口として華やかな景観を生み出すことを目的としています。

一方で、花の広場が積み重ねてきた取り組み—ナチュラルスティックガーデンの導入、順応的な管理、在来種の活用、市民参加型の活動—は、「華やぎ」を演出するにとどまりません。植物を“いきもの”として扱い、人が自然と共に学び、変化を受け入れながら循環を育むという姿勢は、より大きな枠組みである「東京グリーンビズ」の理念と強く重なります。東京グリーンビズは「100年先を見据えた、“みどりと生きるまちづくり”」を掲げ、緑の量の拡大だけでなく質の向上、生物多様性、ネイチャーポジティブなどを重視しています。人工的な埋立地という立地から、草花を通して「自然と人のつながり」を紡ぎ直していく花の広場の活動は、この理念を実際の場で体現する試みともいえるでしょう。

特に草花は、樹木に比べて人が関わりやすく、1年を通して劇的な変化を見せる存在です。だからこそ、市民が参加しやすく、環境意識の変化も生まれやすい。生命の「花」を入口に、楽しさと居心地の良さをきっかけとして、多様な人が自然と出会い、未来を育む拠点になることを花の広場で目指したいです。

おわりに — 100年先の種をまこう

花の広場の歩みを通じて見えてきたのは、植物が「いきもの」として変化し続ける姿に、人も地域も重なり合いながら関わっていくという風景です。小さな循環が積み重なり、やがて大きな流れへと育っていく。その一歩一歩が未来への種まきなのだと思います。人工の大地から芽吹いた緑が、人の営みと響き合いながら100年先へつながっていく。そんな希望を感じながら、これからも「みどりでまちが変わる、人とつながる」を実感させ、さらに大きな可能性へと広がっていくことを期待しています。

人とひと、人とみどりをつなぐエディブル・ランドスケープ EDIBLE WAY プロジェクト

江口亜維子

千葉大学予防医学センター特任助教・EDIBLE WAY 代表
一般社団法人生活と園藝舎代表理事

エディブル・ランドスケープとは

最近、日本でも耳にするようになった「エディブル・ランドスケープ」とは、果樹や野菜、ハーブなど、食べられる植物で構成された造園手法です。家庭菜園や前庭づくりから考案された食卓に美味しく健康的な食べ物を提供し、環境負荷を減らし、美しく計画するものです（Creasy, 1982）。近年、欧米を中心に都市部の公共空間などで、エディブル・ランドスケープを推進する動きが広がっています。例えば、英国・トッドモーデンでは、歩道、空き地など街中のさまざまな場所に食べられる植物が植えられ、「If you eat, you are in!（食べたなら、あなたは参加者!）」と、街中の人々を巻き込み、コミュニティで管理をしています。この取り組みは、地域環境やコミュニティ再生に役立ち、世界中に広がる動きになっています（Warhurst, et al, 2014）。また、海外の研究では、エディブル・ランドスケープが持続可能な都市開発にどのような影響を与えるのかを整理したシステムティック（系統的）・レビュー論文があり、エディブル・ランドスケープは、環境美化だけでなく、生態系改善やコミュニティ形成、健康、教育など多面的な効果をもたらす可能性があることが示されています（Zheng, et al, 2023）。

日本でも、果樹の街路樹が一部で見られるほか、最近では、ビルの屋上や空き地、公園の一角に農園を設ける事例が増えつつあります（新保, 2022）。一方、エディブル・ランドスケープの普及には、維持管理、市民の理解・技術の不足などが課題とされています（Zheng, et al, 2023）。特に日本では「公共空間の私物化」という観点から、公共空間への展開には制度・運用面の障壁が指摘されていました（木下他, 1999）。

EDIBLE WAY プロジェクト

日本の住宅地でのエディブル・ランドスケープの実践として、2016 年当時、所属していた千葉大学大学院園

芸学研究科木下勇研究室のプロジェクトとして開始したのが「EDIBLE WAY（エディブルウェイ）」です。ヒントになったのが、軒先での鉢植えなどによる地先園芸でした。日本に古くからある住民の自発的な都市緑化の手法です。現代の住環境における住居の画一化、閉鎖化がもたらすコミュニティの喪失に対して「公・私」の間に位置する領域の再構築を示す共有領域論では、住宅前の植木鉢は、生活領域の広がりを促し、近隣の交流を促進し、住民の安心感を醸成することが示唆されています（鈴木, 1984）（小林, 1992）。また、路地における鉢植えの緑は、住民間のコミュニケーションを向上させることや（小谷他, 1997）、鉢植えの手入れ頻度の多さと、緑への愛着、近所との立ち話の多さなどが相関すること（水上, 2013）が報告されています。

これらの知見から、沿道で地先園芸的に食べられる植物を育てることで、エディブル・ランドスケープが実現するのではないか。そして、園芸活動を通じて、挨拶程度の近所づきあいが育まれ、安心して暮らすことができる地域環境づくりに貢献できるのではないか。これらのアイデアからエディブルウェイが立ち上がりました。具体的には、千葉大学松戸キャンパス周辺の地域で、沿道の住宅、店舗前の民地側のスペースにロゴを印刷した持ち運び可能なフェルトプランターを設置し、それぞれの場所で、お住まいの方たちが野菜やハーブなどを育て、沿道にプランターが並ぶことで、エディブル・ランドスケープを展開しています。エディブルウェイは、「食べられる＝エディブル（Edible）」「道＝ウェイ（Way）」であり、日本でエディブル・ランドスケープを展開する「方法（＝Way）」を探究していこうという 2 つの意味を持たせた造語です。基本的には、個人的な栽培活動で、収穫もプランターの所有者によりますが、収穫時期に、少しずつ持ち寄り、一緒に調理をして食べる共食活動も計画しました。



沿道に並ぶエディブルウェイのプランター



収穫物を持ち寄ってサンドイッチをつくる



みんなで食べる共食の場

立ち上げ時期は、研究室の大学院生たちが、一軒一軒訪問し、プロジェクトを説明し、活動に賛同した 7 軒の住宅から栽培を始めました。お揃いのプランターが沿道に並んだことが話題になり、沿道での会話や、近所同士の声かけにより、約 2 ヶ月の間で、22 ヶ所の場所にプランターが並ぶようになりました。住宅だけではなく、パン屋さんや小規模保育所なども参加し、2025 年までに、60 ヶ所ほどに 100 個以上のプランターが設置されています。

プランターでは、4～9 月を夏野菜、10～3 月に冬野菜の栽培時期として、各シーズンの植え替え時期に、植え替え講座とタネ・苗の交換会を開催しています。育苗もしており、小学生を含む有志が、各自ベランダや庭で苗を育てています。タネ・苗の交換会には、有志が育

てた苗のほかに、参加者の家で余っているタネや庭で育ちすぎたハーブなどを持ち寄って、それぞれが育てたいものを持ち帰り、植え替えます。交換会は、植物を交換するだけではなく、持ち寄った植物の育て方や食べ方、エピソードなどの話題で盛り上がり、植物を介した交流の場にもなっています。

プランターに植える植物は、野菜、花、ハーブが寄せ植えしてあります。野菜が収穫できるまでの間も、花やハーブを楽しむことができ、用と美を兼ね備えたエディブル・ランドスケープならではの景観となっています。



交流の場でもあるタネ・苗交換会



野菜、花、ハーブの寄せ植えで景観が豊かに

エディブルウェイが育む沿道のコミュニケーション

エディブルウェイを始めてからの変化について、参加者 22 名へのインタビュー調査から、沿道での会話が増えるなど「コミュニケーションの活性化」、既存の地域コミュニティを基盤に関係が深まる「地域コミュニティの向上」、「地域の景観」や「環境教育」への貢献の可能性が示されました（江口他, 2020）。コミュニケーションは、水やりなどの植物の世話をしていると、近所の人だけでなく、見知らぬ人からも声をかけられるようになったようです。野菜の花の珍しさや可愛らしさ、実が成る様子など、普段スーパーで見る野菜の成長していく様子は、子どもだけではなく、大人にとっても新たな発見であり、話題になります。中には、ブロッコリーが育つ様子に興味を持っていたお子さんに、声をかけて収穫をさせてあげたという方もいらっしゃいます。その子は、保育園でもブロッコリーの収穫について話し、収穫させてくれた方を「ブロッコリーのおばちゃん」と呼んで、声を掛け合う関係になったそうです。高齢の参加者の方は、植物の世話が行き届いていないと近所の方に声をかけられるそうで、植物の管理状況がその方が元気であるかどうかの見守りの役割を果たしているようでした。

園庭のない小規模保育所の前にもプランターを設置しており、園児が毎朝水やりをして、収穫した野菜を給食

で食べたり、野菜の断面をスタンプにして工作したり、野菜についてアゲハ蝶の幼虫を保育所で育てて羽化させ、公園へ放しに行ったりと、小さなプランターでも自然観察や園芸体験、食育などさまざまな用途に活用されています。



植物の成長が話題に

保育所前のプランター

コロナ禍で始めたクラフト活動

2020年のコロナ禍では、共食活動を休止し、代わりにクラフト活動を取り入れ、剪定枝を活用したクラフトサインを作り、各世帯のプランターに設置しました。コロナ禍での活動について参加者20名へのインタビュー調査では、地域行事は減少したものの、水やりの際の立ち話など日常的な近所付き合いは8割で大きな変化はなく、概ね維持されていました。特に、クラフトサイン設置後は、他のプランターを意識して見る機会が増え、外出時の間接的なコミュニケーションや対面時の会話のきっかけとなっていました。中にはクラフトサインを見に子どもと散歩をするようになった方もいました（江口他, 2021）。



クラフトサイン

※北欧の妖精「トムテ」をモチーフにしたクラフトサイン。トムテは、農家を守るトロール。

以降、クラフト活動もエディブルウェイの活動の一部になり、定期的にハーブや植物を使ったクラフトワークショップを開催しています。園芸福祉の分野で、クラフトは、園芸活動への導入や動機づけとなること、飾ること

で会話を促すことが示されています（日本園芸福祉普

及協会, 2007）。クラフトワークショップは、子ども向け、大人向けとそれぞれ対象の年代を想定して企画をしますが、テーマに関心がある方は誰でも参加ができるように、意図的に対象年齢を記載せずに募集をしています。子ども向けの会に、付き添いの保護者も参加者として一緒に参加することもあれば、内容に関心を持った高齢者の方が参加することもあります。毎回数名は、想定と異なる世代が参加するため、多世代交流の場にもなっています。深い交流があるわけではありませんが、多世代が共存する空間で、一緒にクラフトづくりをして、植物を介したゆるやかな交流が生まれています。



多世代が参加するクラフトワークショップ

みんなで育てる「まちのプランター」



歩道に置かれたまちのプランター

エディブルウェイは、2024年度から、松戸市みどりと花の課との協働事業を開始し、対象地域の約300mの歩道に設置されていた11基の大型プランターを「まちのプランター」として、エディブル・ランドスケープの実践を始めました。大型プランターはこれまで、松戸市が管理し、年に4回の頻度で、業者が花苗を植え替えていたものです。活動開始にあたり、エディブルウェイ、松戸市、地域包括支援センター、町会、子ども会など地域で活動する方々と「まちのプランター作戦会議」を開

き、活動内容や管理方法について話し合いました。

植物は、実がなる植物は盗難の懸念もある一方、多く実がなり、子どもが摘んで食べて楽しめることや、日常的な使いやすいことなどの意見から「すぐ食べられる」「実が多くなる」「食卓で使いやすい」「持ち帰りやすい」という視点で、選ぶことになりました。水やりは、当番制は負担が大きくなることから、日常の通勤・通学や散歩のついでなど、それぞれのタイミングで、2Lペットボトル程度の無理ない範囲で分担する方法が採用されました。各プランターには、いつ、誰が、どの程度水をあげたか記録できる管理表を設置し、情報共有する方法が提案され、日常の管理状況は、この管理表とLINEのオープンチャットを活用して共有しています。収穫は、トッドモーデンの事例を参考に、管理に参加すれば収穫してよいルールにし、水やりの時など、食べ頃のものがあれば、摘んで食べることができます。懸念点である虫の発生は、これまでに子どもたちがプランターについての青虫を観察した経験を踏まえ、昆虫観察の機会として捉え、また、勝手に収穫する人がいた場合は、活動への参加を促す機会として捉えることとし、まちのプランター活動においては、「寛容さ」を大切にする方向性が共有されました。

翌月の植え付け会には、子どもから高齢者まで40名以上が参加し、食べられる植物を育てることへの興味関心がかがえました。各プランターは、野菜・花・ハーブを寄せ植えし、見た目も収穫も楽しめるようにレイアウトしています。



野菜・花・ハーブが寄せ植えされている

プランターに設置した水の管理表

日常的には各自が手入れしていますが、毎月1回、集合してお世話会を開き、植物の世話と活用できる植物を活用したミニワークショップとしてクラフトや共食の会を開催しています。お世話会には、未就学のお子さんから、90代の高齢者まで幅広い世代が参加しています。活動当初は、世代の異なる参加者が一緒に作業をするこ

とは少なく、違う世代への声かけの遠慮も見られましたが、一緒に作業をしなくても、違う世代が同じ空間に一緒にいることに価値が見出されました。回を追うごとに、違う世代でも声かけや手伝いなど自然な交流が生まれていき、ともにつくる・育てる関係性へと変化していきま

した（江口, 2025）。園芸療法の第一人者であるダイアン・レルフは、人間のwell-beingと生活の質における植物と園芸の役割として、生理的・心理的・社会的な健康への効果を報告し、特に社会的健康における効果として、コミュニケーションや分かち合いの機会の創出を示しています（Relf, 2001）。まちのプランターでは、栽培や収穫はもちろん、自然観察の楽しさや、緑にふれる癒し、外出の機会、体を動かす機会にもなっています。特にお世話会での一緒に世話を

をする、収穫をする、収穫物を使ったクラフトや共食をするといった活動は、「コミュニケーションの促進」および「分かち合いの場の創出」に貢献していると考えられます。世話をしていると通りすがりの方から、お礼を言われることもめずらしくなく、「楽しみにしています」「スイカがかわいかったね」「ごみが減った」と声をかけられることもあり、地域の新たな交流のきっかけにもなっています。



お世話会での植え替え

お世話会での収穫



お世話会でのミニワークショップ

手浴体験

人とひと、人とみどりをつなぐ

エディブル・ランドスケープ

エディブル・ランドスケープは、植物を育て景観を整備するだけでなく、成長や収穫の喜び、収穫物の分かち合いなどを通じて、どの世代にも参加の機会を提供します。子どもにとっては、屋外で身体を動かしながら自然の変化を感じ、好奇心や探究心を育むとともに、多世代交流を通じて社会性を養うきっかけになるかもしれません。保護者にとっては、子育てのストレスを和らげ、園芸活動を楽しみながら地域での相談や情報交換の場に

つながる機会になるかもしれません。高齢者にとっては、外出や歩行のきっかけとなり、引きこもり防止や社会参加の維持に寄与することが期待されます。

このように、沿道や歩道といった生活に身近な場所で展開されるエディブル・ランドスケープは、「景観を楽しむ」「共に世話をする」「場を共にする」「収穫を分かち合う」などの活動を通じて、地域での学び合いや交流の機会を提供します。そして、人とひと、人とみどりをつなぎ、安心して暮らせる持続可能な地域社会を育む景観となるのではないかと考えています。

【引用文献】

- Rosalind Creasy: "The Complete book of Edible Landscaping", Sierra Club Books, San Francisco, 1982
WARHURST, P., et al.: INCREDIBLE! PLANT VEG, GROW A REVOLUTION, TROUBADOR PUBLISHING LTD, 2014
Zhi-Wei Zheng, Rung-Jiun Chou: The impact and future of edible landscapes on sustainable urban development: A systematic review of the literature, Urban Forestry & Urban Greening, Volume 84, 2023
新保奈穂美:『まちを変える都市型農園: コミュニティを育む空き地活用』, 学芸出版社, 2022
木下 勇, 吉川 仁: 都市におけるエディブル・ランドスケープ (食べられる景観) の意味と役割について, 都市計画論文集 34 巻, pp.361-366, 1999.10
鈴木成文: 「いえ」と「まち」, 鹿島出版社, 1984
小林秀樹: 集住のなわばり学, 彰国社, 1992
小谷幸司, 柳井重人, 島田正文, 勝野武彦, 丸田頼一: 東京都中央区における路地の緑の実態と住民意識に関する研究, 環境情報科学論文集11, 環境情報科学センター, p.261-266, 1997
水上象吾: 路地における鉢植えの緑の設置状況と居住者意識, 環境情報科学論文集, 27, p.209-214, 2013
江口 亜維子, マリア・エルミロヴァ, 阿部 健一, 木下 勇: 住民参加型の住宅地沿道におけるエディブル・ランドスケープ (食べられる景観) に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 85 巻, 776 号, p. 2183-2192, 2020
江口亜維子, 柳井重人: 住宅地沿道における園芸活動が地域住民のコミュニケーションに及ぼす影響 コロナ禍での千葉県松戸市エディブルウェイプロジェクトを事例に, 日本生活学会第48回大会梗概集, p. 105-106, 2021
近藤まなみ, 進士五十八・吉長成恭監修, 日本園芸福祉普及協会編:『園芸福祉入門』創森社, 2007
Relf, P.D.: The role of plant and horticulture in human well-being and quality of life. 人間・植物関係学会誌, 1(1), 2-5, 2001
江口亜維子: 歩道空間におけるエディブル・ランドスケープの実践が地域のウェルビーイングに与える影響, 日本生活学会第52回大会梗概集, p.106-107, 2025

にっぽーくで目指す インクルーシブな人・物・場づくり (羽村市)

小林原生

日都産業株式会社 技術部 デザイン課長

東京都羽村市と日都産業株式会社は 2023 年 12 月にネーミングライツ・パートナー協定を結び、「にっぽーく」と命名された公園にユニバーサルデザイン遊具を設置しました。

市としては市内でインクルーシブな遊び場を普及促進し、公園サービスの向上、くらしやすいまちづくりに貢献すること、メーカーとしては遊具を開発し検証を行うことでユニバーサルデザイン遊具やインクルーシブな場が発展していくことを期待しています。



にっぽーくの整備



イベントでのひとこま

インクルーシブ・プレイグラウンドを目指して

誰もが遊べる広場の整備が全国的に広がっている中で、配慮された遊具が設置されてもお遊べないユーザーが多くいると感じています。例えば車いすユーザーからは「たくさん子どもたちが走り回っている中に車いすで

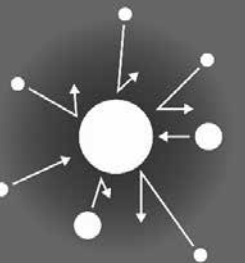
入っていくには勇気がいる」といった声を聞きます。

インクルーシブな遊び場実現を目指すためには、そういった当事者ユーザーの声を聞き、ハードとソフト両面で課題解決することが必要不可欠です。

にっぽーくは当事者ユーザーの話を聞くために、羽村特別支援学校の隣にある公園を選びました。親子だけで公園遊具を日常的に使うことが困難でも、学校や保育所、デイサービスなど、サポートするスタッフと一緒に団体で利用すれば遊びやすくなることがあります。

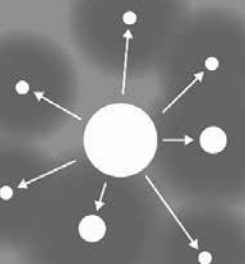
そして最初に遊具を作りすぎないことにこだわって整備を行いました。派手な遊具で大人気の遊び場が作られてしまっでは、前述の車いすユーザーのようにマイノリティが入りにくくなることがあります。不便と思われるところも残しておくことで、意見を聞きだし、改善の方法を模索することができます。①遊んでもらう→②意見を聞く→③修正する→④少しずつ遊具やイベントが充実→⑤さらに多くの人に遊んでもらう→・・・というサイクルを回して、長期的な視点で、ソフト面、ハード面での課題を解決しながら当事者ユーザー発のインクルーシブ・プレイグラウンドを目指して発展させていく構想です。

マジョリティの世界を
ユニバーサルデザインで
広げてマイノリティに
入ってきてもらう



マイノリティが
入っていきにくい

マイノリティの世界を
インクルーシブデザイン
で広げてマジョリティに
入ってきてもらう



マイノリティから
広がっていく

にっぽーくであそぼう！ イベント開催

インクルーシブという概念や、誰もが遊べる公園という存在が浸透していないため、まず住民の方に知っていただくためにイベントを行いました。

イベントの計画にあたって、2022年から東京都立府中の森公園の誰もが遊べる広場「にじいろ広場」で行っている遊具体験会で当事者ユーザーから聞いた意見、要望、一緒に遊ぶ中で学んだノウハウを採り入れました。さらに、ユーザー、自治体、学校、企業など垣根を越えたSNSグループ「未来公園 LABO」を結成し、ワークショップを開催。心の壁を取り除き、障がいのあるなしに関わらず、多様な人たちと交流して遊ぶにはどのような仕掛けがあれば良いか？といった議論を交わし、イベントの準備を行いました。

また、新製品やプロトタイプの商品を仮設で設置し、遊具の設計者がユーザーと一緒に遊び、学ぶ機会としています。



新開発のぶらんこシート



テーブル型砂場とカームダウンスペース

- ・ユニバーサルシートのあるトイレや休憩スペース

トイレ内のオムツ替え用シートは一般的に乳幼児用が多く、体が大きくなると使えないことがあります。公園のトイレでユニバーサルシートが完備されていることは稀です。イベント当日は羽村特別支援学校の教室とトイレをお借りしました。



ユニバーサルシートの参考

- ・後方ヘスロープを降ろせる十分な広さの駐車スペース
障がい者用の駐車スペースがあったとしても、車両後方にスロープや昇降機を安全に降ろせる2～3m程度のスペースが確保できない場合があります。これに関しても羽村特別支援学校の駐車場をお借りしました。



車両後方スペースの参考

- ・コミュニケーションを取りやすくする
受付テントを設置し、好きな遊具に投票する催しと、チョークを用意して園路の舗装に自由にお絵かきができる遊びを用意しました。同じ遊具で一緒に遊ぶというのは、相手の好き嫌いや身体能力を把握できない状態ではなかなか難しいことです。大人にとってはケガやトラブルも心配です。順番待ちの時間に少し挨拶やお話ができる、チョークや砂場道具の貸し借りをするなど、気軽なコミュニケーションが生まれる設えがあると良いと感じます。



チョークでお絵かき



遊んでみたい遊具投票

- ▶未来公園 LABO の取組、イベントレポートなど詳しくはQRコードから特設サイトをご覧ください。

府中の森公園遊具体験会
ワークショップ



にっぽーくであそぼう
ワークショップ



特別支援学校の先生と共に

最初の遊具設置からおおよそ1年後、羽村特別支援学校の先生へ、新しく開発した砂場の設置場所など、遊具を使いやすくするためのヒアリングを行いました。

- ・遊具の配置場所

砂場に関しては、砂を口に入れてしまう子もいるので、利用のコントロールをしたいということで、ぶらんこなど他の遊具から少し離して配置すると良いという意見がありました。同時に全ての遊具が見渡せられるように配置場所を検討しました。

- ・順番待ちしやすい仕掛け

子どもが順番を守って遊べるかは多くの親の心配事だと思います。どこに並ぶのかといった順番待ちのルールは、遊具によって、その時々で変わったりするので理解する子どもたちは大変です。「1番に座ってね」などのわかりやすい指示ができるようにスツールを配置しました。スツールは元々公園にあったものを移設し、スツールのデザインは先生にお願いしました。羽村市には市営の動物公園があり、そこにいる動物を描くことでより馴染み深いデザインとなりました。数字がわからなくても「キリンさんに座ってね」と伝えることができるので、順番待ちが楽しくなりそうです。

- ・遊具周りの舗装

遊具の周りは車いすで走行しやすく、はいはいしても安全なやわらかめのゴム舗装を希望されました。これには大きな予算が必要になるため、舗装する範囲は希望に

添えない場合があります。今後、安価で管理しやすい安全な舗装が開発されることを期待して、最低限の遊具周りのみ舗装しました。



打合せ風景



スツールのデザイン原画



順番待ちスツール



遊具周りのゴム舗装

インクルーシブな遊び場の答えは一概ではありません。地域によって、使う人によって異なるカタチになると思います。にっぽーくも、これからどんなカタチになっていくかわかりませんが、変化を楽しみに取り組んでいきたいと思っています。

館山市における公園から「みどりのまちづくり」へ ～地方都市での都市公園の指定管理者の取り組み～

塚原道夫、中丸仁、松島学、鈴木健太

株式会社 塚原緑地研究所

1. はじめに

株式会社塚原緑地研究所（以下「当社」という。）は、令和元年12月から館山市の指定管理者として都市公園等の管理運営を行っている。館山市は、「花のまちづくり」を推進しており、指定管理者である当社は都市公園において館山市と連携する取組みを行っている。

2. 館山市の都市公園

館山市には街区公園4、近隣公園1、地区公園1、総合公園1、風致公園2、合計9の都市公園がある（県立公園を除く）。このうち7公園が指定管理者によって管理運営されている。

名 称	面積（㎡）	種別	摘 要
中村公園	1,800	街区	
根岸公園	2,700	街区	
船形公園	1,800	街区	
館山駅西口公園	1,560	街区	
北条中央公園	16,800	近隣	
宣城公園	31,200	地区	赤山地下壕跡
城山公園	101,600	総合	館山市立博物館・館山城（八犬伝博物館）
沖ノ島公園	27,600	風致	
高ノ島公園	15,200	風致	

城山公園の四季



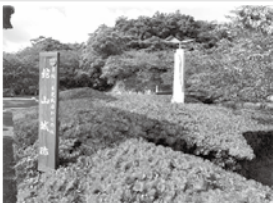
満開の梅園(2月)



桜咲き誇る館山城(4月)



ツツジ満開(5月)



芝生広場のサツキ(5月)



四季の丘のアジサイ(6月)



館山城とヒマワリ(8月)

3. 指定管理者の取り組み

(1) 相次ぐ試練を乗り越えて

令和元年、房総半島を襲った台風は館山市に甚大な被害をもたらした。公園は、倒木、枝折れ、がけ崩れ等、大きな被害を受けた。台風被害からの復興のさなか、当社の指定管理は始まった。さらに、翌年2月に新型コロナウイルスによる世界的拡大（パンデミック）が起こり、感染防止のために施設の閉鎖、休館等に追い込まれた。このような相次ぐ試練を乗り越えて指定管理者第1期の5年間で終了した。令和6年12月から第2期に取組んでいる。

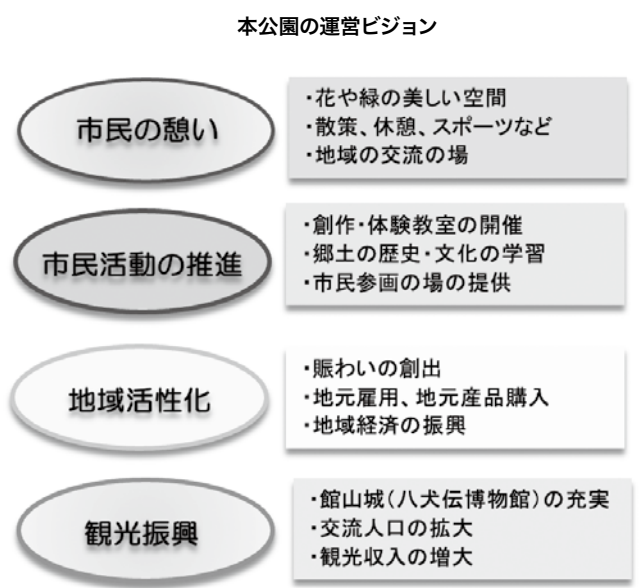
(2) 管理運営の基本方針

第2期における管理運営の方針は次のとおりである。

項 目	内 容
利用促進の取り組み	指定管理者として5年間の実績に基づいて、さらに魅力を高めて利用促進に取り組む。
サービス向上の取り組み	適切な指導育成・研修を行って職員の能力向上を図り、モチベーション高くおもてなしの心を持った職員を配置する。
地域等との連携、市民協働の取り組み	館山市の地域団体、教育機関、観光団体等と良好な関係を構築した。市民ボランティアの方々が活動に参加している。地域等との連携、市民等との協働に取り組む。
館山市民の福祉向上への貢献	自然とのふれあい、健康づくり、地域の交流等、市民の貴重なレクリエーションの場となっている。公園を活用して館山市民の福祉の向上に貢献する。
館山市の観光振興・地域活性化への貢献	公園は館山市の重要な観光資源である。利用促進を図ることによって、館山市の観光振興、地域活性化に貢献する。

(3) 目指す姿

本公園の目指す姿（ビジョン）は次のとおりである。



(4) 市民連携の基本的な考え方

市民連携を重視する管理運営を重視している。基本的な考え方は次のとおりである。

項 目	内 容	
住民参加型「わたしの公園」の意識づくり	近隣住民や公園を利用する方々により身近に感じてもらう	地元高校生への参加を呼びかけ、楽しみながら花に触れる機会を増やす。 自然観察会や植栽ボランティア活動を通し、日々の生長・季節の移り変わりを肌で感じてもらう。
	利用者としてではなく、自分事として関われる公園づくり	公園協議会を設立して主体性のあるリーダーを中心に新しい公園の在り方について討論し合う場を提供、公園運営に随時取り入れる。 アンケート調査を行って利用者の意見を公園運営に反映する。
誰もが居心地の良いと感じられる公園づくり	世代を問わず過ごせる空間づくり	交流の場、人々のふれあいの場となる。
	野外の特性を生かした、管理された自然を提供	季節の花や植物の成長を手軽に感じられる公園づくり。
資源(財産)を無駄にしない循環		閉校になった学校の花壇・植物を公園で活用する。
		管理しきれなくなった花を新しい里親へ繋ぐマッチングをする。
		剪定枝を粉碎して肥料をつくって土づくりに活用する。
		花苗は近隣の農業高校の生徒が育てたものを使用する。
		獣害やナラ枯れ被害も自然の営みを知る資源とする。

(5) 連携による活動

各種団体との連携による活動は以下のとおりである。

	団体名	催し名	形態
1	仲町地区	山車と神輿のお披露目	協力
2	千葉県立安房高校生徒	花壇花植え	共同
3	千葉県立安房西高校JRC部	花植えとイルミネーション	共同
4	千葉大学	竹灯籠デザイン作成	協力
5	千葉大学	南総里見八犬伝掛け軸デジタルプリント	共同
6	里見まちづくり実行委員会	ランタンイベント（6回）	共催
7	里見まちづくり実行委員会	コスプレイベント（1回）	共催
8	awan market	awan marketの開催	協力
9	マザーズタッチ	アップサイクルイベント（CleaningDay）	共催
10	市民協力者	公園協議会	協力
11	館山同好会	ラジオ体操を広げる運動	主催
12	館山ライオンズクラブ	ツバキの種採取と苗づくり	協力
13	株式会社伊藤園	桜の苗木を園児と植樹式	協力
14	社会福祉法人三芳野会「やわたの杜」	ピーチクリーン・花壇花植え	共催
15	市内学習塾	ハロウィン・お店屋さんごっこ	共催
16	南房総忍者の里	手裏剣イベント	支援
17	館山市観光協会	竹灯籠づくり体験・竹灯籠公園内点灯	共催
18	館山市観光協会	館山城お月見会	共催
19	館山市都市計画課	ガーデンウィーク	共催
20	館山市立図書館	図書館まつり	支援
21	館山市生涯学習課	彫刻の径にある彫刻作品の清掃	共同



花植え



ピーチクリーン



障がい者参加型花壇整備



公園協議会

(6) 自主事業

指定管理者は決められた業務以外に自主的に事業を行うことが認められている。公園の魅力向上・利用促進を

図るために様々な事業を実施した。

自主事業としての催しの開催状況は以下のとおりである。

No	名 称	No	名 称
1	館山城展示場で八犬伝総選挙	23	ランタンナイトin城山公園
2	館山城天守閣に鯉のぼり掲揚	24	ガラポン無料抽選会
3	影絵芝居	25	お月見会&館山城夜間特別開館
4	ダイヤモンド富士鑑賞	26	謎解きゲーム「館山城を救え!」
5	有料エアー遊具 ふわふわチーバくん	27	どんぐりくじと花苗配布
6	たてやまガーデンウィーク in城山公園	28	クリスマススワッグ教室
7	たてやまガーデンコンテスト	29	自然観察フォト散歩
8	梅の実収穫体験	30	オリジナルポットアート教室
9	出張デジタル工房で万祝プリント 体験	31	つるかご作り教室
10	寄せ植えづくり教室	32	カレンデュラ石鹸作り教室
11	自然観察会	33	西口公園イルミネーション2023
12	美しきガラクタ市	34	館山城コスプレイベント
13	竹垣づくり教室	35	館山城 門松設置
14	ヒタイイベント	36	館山城年始特別開館
15	竹灯籠づくり体験	37	筆あそび 書初め体験
16	ダイヤモンド富士	38	筆あそび 書道パフォーマンス
17	竹灯籠ライトアップ	39	節分イベント
18	城山公園ラジオ体操	40	八犬伝と双六展
19	馬琴展	41	夜桜ライトアップ
20	呈茶（茶道連盟）	42	おもてなし武将隊・大道芸
21	たねダンゴづくり教室	43	ハロウィンwithお屋さんごっこ
22	AWAN MARKET	44	図書館まつり（中央公園イベント）



園芸教室



茶道入門



八犬士（大史記念写真）



館山城40周年記念イベント



謎解きでの記念撮影



バーベキュー



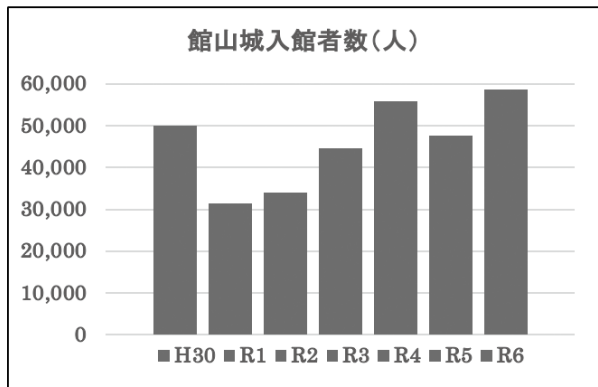
オリジナルポットアート



紙芝居

(7) 利用状況

城山公園に館山城（八犬伝博物館）がある。これは館山市立博物館の分館であり、指定管理者が企画・展示を行っている。入館者数は、令和元年は台風被害、令和2年はコロナ禍のために大きく減少したが、令和3年以降増加に転じて、以前の入館者数を超えている。



(8) 全国花のまちづくりコンクール

～「花のまちづくり 市町村部門 優秀賞」を受賞～

全国花のまちづくりコンクール（提唱：農林水産省及び国土交通省、主催：花のまちづくりコンクール推進協議会）は、平成2年に開催された国際花と緑の博覧会の理念「自然と人間との共生」を継承し、花のまちづくりの発展及び花の社会性の向上を目的として平成3年より全国各地の優れた花のまちづくり活動を表彰している。

館山市と指定管理者による花のまちづくりの取り組みは、花のまちづくりコンクール推進協議会（会長 野路國夫）の第32回（2022年）全国花のまちづくりコンクールにおいて、「館山市・株式会社社塚原緑地研究所」が、「花のまちづくり 市町村部門 優秀賞」を受賞した。指定管理者として館山市と連携して取り組んだことが高く評価されたものである。

(9) 施設整備

①サル舎の改修 ～動物福祉を改善する取り組み～

城山公園には2頭のサルが飼育されている。サルの

世話をすることも指定管理者の業務である。サル舎は老朽化し、サルはせまい檻の中で飼育されていた。サルの飼育環境が悪い、サルがかawaiiそうだと、との苦情が寄せられていた。改修の資金が手当てできない館山市は対応に苦慮していた。

そこで、当社は資金を負担してサル舎の新設を行った。住まいを新装されたサルたちは喜んでいるが、残念ながらサルたちから感謝の言葉はない。



新設したサル舎

②砂場の新設

市内には就学前の子供たちが遊べる公園が少なく、砂遊びがしたいという子どもたちの声があった。そこで、当社が費用を負担して、城山公園に砂場を整備した。遠くの公園までいかずに、近くの公園で砂遊びができると親子たちに喜ばれている。



新設した砂場

③恋人の聖地に新モニュメント設置

～クラウドファンディングによる寄付金を得て～
城山公園の展望広場は、「恋人の聖地」スポットに選定されている（令和7年度時点）。館山市随一の絶景ポイントである同広場は、美しい館山湾や富士山が見渡せ、住民や観光客から親しまれてきた。従来のモニュメント

は老朽化が進み、利用者からは「思ったよりさみしかった」などの声が上がっていた。

そこで、広場の魅力を高めるための資金を得るためにクラウドファンディングを実施した。賛同した市民・団体等からよせられた寄付金を活用してモニュメントのリニューアルを行った。新モニュメントは高さ2m、「親愛」をテーマに丸パイプで円とハートを表現している。城山公園の新たな観光スポットとなっている。



恋人の聖地 新モニュメント

4. 結び

～都市公園の管理運営をととして、豊かな市民生活・まちの発展に貢献する～

令和元年、2度にわたって房総半島を襲った台風は館山市に大きな被害をもたらした。市内には暴風によって飛散した屋根を覆ったブルーシートが目立った。停電、通信や交通、給水などのインフラの復旧に時間を要して、市民は長期間にわたった被災生活に耐えていた。公園等の指定管理者となった当社は、被災に苦しんでいる館山市のために傷んだ公園を復旧して、市民の拠り所とすることが最初の仕事であった。さらに、令和2年度はコロナ禍が発生して、公園は閉鎖・休館等に追い込まれた。このような逆境の中、当社は館山市、館山市民、各種団体と連携してこれらの試練を乗り越えて公園の再生に取り組んだ。公園は市民や観光客が戻り、市民生活の場、まちづくりの拠点、観光の目玉としての姿を取り戻した。

私たちは、公園等の管理運営をととして、館山市における豊かな市民生活の実現、活力ある地域社会の創出、観光の振興に、引き続いて貢献していく。

一般社団法人ランドスケープコンサルタンツ協会 会員名簿

会員名簿

正会員 81 ◎：会長 ○：副会長 ◇：理事 □：監事

会員名	電話番号		協会代表者	〒	所在地	FAX番号
株アーバンデザインコンサルタント	03-3353-1016		宮地奈保子	160-0004	新宿区四谷 4-30-14 服部ビル	03-3353-1018
株アーバンデザインコンサルタント	092-282-1788	○	大杉哲哉	812-0029	福岡市博多区古門戸町 7-3 古門戸中埜ビル	092-282-1777
株愛植物設計事務所	03-3291-3380		趙 賢一	101-0064	千代田区神田猿楽町 2-4-11 犬塚ビル	03-3291-3381
株あい造園設計事務所	03-3325-6660	◇	鈴木 綾	168-0063	杉並区和泉 3-46-9 YS 第一ビル	03-3325-6262
株荒木造園設計	0727-61-8874		荒木美真	563-0024	池田市鉢塚 2-10-11	0727-62-8234
株荒谷建設コンサルタント	082-292-5481		長谷山弘志	730-0833	広島市中区江波本町 4-22	082-294-3575
株エイト日本技術開発	03-5341-5151		村山克也	164-8601	中野区中野 2-24-11 住友不動産中野駅前ビル	03-5385-8505
株エコル	03-5791-2901		大島 渡	108-0074	港区高輪 3-4-1 高輪偕成ビル	03-5791-2902
株エス・イー・エヌ環境計画室	06-6373-4117		津田主税	530-0014	大阪市北区鶴野町 4-11-1106	06-6373-4617
株エスティ環境設計研究所	092-271-3606		澁江章子	812-0028	福岡市博多区須崎町 12-8	092-271-3662
株オオバ	03-5931-5812		北村史高	101-0054	千代田区神田錦町 3-7-1 興和一橋ビル	03-5931-5817
株環境・グリーンエンジニア	03-5209-3691		小林哲央	101-0041	千代田区神田須田町 2-6-5 OS'85 ビル	03-5209-3696
環境設計株	06-6261-2144		井上 健	541-0056	大阪市中央区久太郎町 1-4-2	06-6261-2146
株環境デザイン研究所	03-5575-7171		佐藤文昭	106-0032	港区六本木 5-12-22 永坂ビル	03-5562-9928
株環境緑地研究所	011-221-4101		太田幸司	060-0004	札幌市中央区北 4 条西 6-1-1 毎日札幌会館	011-221-4237
株環境緑地設計研究所	078-392-1701		八木 啓	650-0024	神戸市中央区海岸通 2-2-3 サンエービル	078-392-1576
株神田設計	052-522-3121		吉川明宏	451-0062	名古屋市西区花の木 1-3-5	052-522-3000
株環ヴィトーム	097-534-1436		松本克哉	870-0046	大分市荷揚町 10-13	097-537-8578
キタイ設計株	0748-46-4902		梶 雅弘	521-1398	近江八幡市安土町上豊浦 1030	0748-46-5620
株空間創研	075-823-6331	○	宇戸睦雄	600-8392	京都市下京区綾小路通堀川西入妙満寺町 580 番地 1	075-823-6332
株グラック	03-3249-3010		北川明介	103-0004	中央区東日本橋 3-6-17 山一織物ビル	03-5645-7685
株クロス・ポイント	045-777-2027		堀川朗彦	223-0062	横浜市港北区日吉本町 2-44-40-209 号	045-514-8529
株KRC	026-285-7670		宮入賢一郎	381-2217	長野市稲里町中央 3-33-23	026-254-7301
景域計画株	045-263-9504		八色宏昌	231-0005	横浜市中区本町 1-5-2-2D	045-263-9505
株景観プランニング	028-615-7500		柳田千恵子	320-0026	宇都宮市馬場通り 3-2-9 マスキニアネックスビル	028-615-7513
株建設環境研究所	03-3988-1818		川鍋範廣	170-0013	豊島区東池袋 2-23-2	03-3988-2018
株現代ランドスケープ	06-6203-1270	◇	西辻俊明	541-0046	大阪市中央区平野町 3-1-10-603	06-6203-1271
株公園マネジメント研究所	06-6947-6522	◇	小野 隆	540-0012	大阪市中央区谷町 2-2-22 NS ビル	06-6947-6523
サンコーコンサルタント株	03-3683-7152		串田宗史	136-8522	江東区亀戸 1-8-9	03-3683-7116
株CES . 緑研究所	045-315-2524	◇	手塚一雅	231-0014	横浜市中区常盤町 2-10 常盤不動産ビル 305	045-315-2518
シビックアーツコンサルタント株	092-555-4151		書川真一	815-0032	福岡市南区塩原 4-5-29	092-555-5693
株シビテック	011-816-3001		吉川明德	003-0002	札幌市白石区東札幌 2 条 5-8-1	011-816-2561
株シン技術コンサル	011-859-2604		内藤佳樹	003-0021	札幌市白石区栄通 2-8-30	011-859-2614
株スペースビジョン研究所	06-6942-6569		安場浩一郎	540-6591	大阪市中央区大手前 1-7-31 OMM ビル	06-6942-6897
株セット設計事務所	042-324-0724		和田 淳	185-0012	国分寺市本町 2-16-4	042-324-3468
株ZEN環境設計	092-643-5500		中村久二	812-0053	福岡市東区箱崎 1-32-40	092-643-5520
株爽環境計画	03-3829-4691		木村 隆	130-0013	墨田区錦糸 3-7-11 メゾン・ド・ファミリール	03-3829-4692
株総合計画機構	06-6942-1877		濱口和雄	540-0012	大阪市中央区谷町 2-2-22 NS ビル	06-6942-2447
株総合設計研究所	03-3263-5954	□	石井ちはる	102-0072	千代田区飯田橋 4-9-4 飯田橋ビル 1 号館	03-3263-7996
第一復建株	092-412-2230		箱嶋 斉	812-0006	福岡市博多区上牟田 1-17-9	092-412-2240
ダイシン設計株	011-222-2325		追山公宏	060-0005	札幌市中央区北 5 条西 6-1-23	011-222-9103

会員名簿

会員名	電話番号		協会代表者	〒	所在地	FAX番号
大日コンサルタント株	058-271-2659		岩田裕憲	500-8384	岐阜市藪田南 3-1-21	058-276-6418
大日本ダイヤコンサルタント株	03-5298-2051		高橋雅幸	101-0022	千代田区神田練堀町 300 番地 住友不動産秋葉原駅前ビル	03-5295-2130
高野ランドスケーププランニング株	011-738-5661	◎	金清典広	060-0020	札幌市中央区北 20 条西 15 丁目 7-21	011-738-5662
株地域計画建築研究所	06-6205-3600		水谷省三	541-0042	大阪市中央区今橋 3-1-7 日本生命今橋ビル	06-6205-3601
株地球号	06-6945-7566		中見 哲	540-0031	大阪市中央区北浜東 6-6 アクアタワー	06-6945-7595
中央コンサルタンツ株	052-971-2541		三浦利夫	460-0002	名古屋市中区丸の内 3-22-1	052-971-2540
株塚原緑地研究所	043-306-8446	◇	塚原道夫	261-0004	千葉市美浜区高洲 3-11-3 第 2 並木ビル	043-306-8447
株辻本智子環境デザイン研究所	0799-72-0216		辻本智子	656-2401	淡路市岩屋 3000-176	0799-72-0217
株ドーコン	011-801-1535	◇	福原賢二	004-8585	札幌市厚別区厚別中央 1 条 5-4-1	011-801-1536
株東京ランドスケープ研究所	03-6859-1088		小林 新	151-0071	渋谷区本町 1-4-3 エバーグレイス本町	03-6859-1087
株都市技術設計コンサルタント	096-389-8453		西田公一	861-8045	熊本市東区小山 2-23-69	096-389-8506
株都市計画研究所	03-3262-6341		石川 純	103-0014	中央区日本橋蛸殻町 2-13-5 美濃友ビル	03-3669-8924
株都市整備コンサルタント	011-643-6951		大沼俊道	060-0001	札幌市中央区北 1 条西 19-1-4	011-612-7583
株都市ランドスケープ	03-5269-8982		嶋村 仁	162-0065	新宿区住吉町 5-7 曙橋ハイム鍋倉	03-6384-1814
株トロピカル・グリーン設計	098-832-3169		喜屋武 忍	902-0072	那覇市字真地 388 番地 6	098-832-6374
株中根庭園研究所	075-465-2373		中根史郎	616-8013	京都市右京区谷口唐田ノ内町 1-6	075-465-2374
株虹設計事務所	03-3419-7259		光益尚登	154-0001	世田谷区池尻 3-3-1 キドビル	03-3419-7246
NiX JAPAN株	076-464-6520		西田 宏	930-0857	富山市奥田新町 1 番 23 号	076-464-6671
日本工営都市空間株	052-979-9111	◇	則竹登志恵	461-0005	名古屋市東区東桜 2-17-14 新栄町ビル	052-979-9112
株ニュージェック	06-6374-4032		堀内康介	531-0074	大阪市北区本庄東 2-3-20	06-6374-5147
パシフィックコンサルタンツ株	03-6777-4433		松延 稯	101-8462	千代田区神田錦町 3-22 テラススクエア	03-3296-0530
早川都市計画株	0565-85-0381		石川 武	471-0868	豊田市神田町 1-5-7	0565-85-0382
株復建技術コンサルタント	022-262-1234		仲村明信	980-0012	仙台市青葉区錦町 1-7-25	022-265-9309
復建調査設計株	082-506-1853		藤田健一	732-0052	広島市東区光町 2-10-11	082-506-1890
㈲ブラネット・コンサルティングネットワーク	03-3652-5508		岡島桂一郎	132-0025	江戸川区松江 7-21-19	03-3652-5506
株ブレック研究所	03-5226-1101		杉尾大地	102-0083	千代田区麹町 3-7-6 麹町 PREC ビル	03-5226-1112
株文化環境設計研究所	03-6321-8062		落合直文	165-0026	中野区新井 1-12-6 B 102	03-6321-8062
株ヘッズ	06-6373-9369		田中 康	530-0022	大阪市北区浪花町 12-24	06-6373-9370
北海道造園設計株	011-758-2261		佐藤俊義	060-0807	札幌市北区北 7 条西 2-6 山京ビル	011-709-5341
株ポリテック・エイディディ	03-6222-8912		吉田 博	104-0041	中央区新富 1-18-8 RBM 築地スクエア	03-5541-3510
株三菱地所設計	03-3287-5750	□	植田直樹	100-0005	千代田区丸の内 2-5-1 丸の内二丁目ビル	03-3287-3230
株緑設計	0188-62-4263	◇	板垣清美	010-0973	秋田市八橋本町 4-10-26	0188-62-4273
株緑の風景計画	03-3422-9511	◇	板垣久美子	154-0012	世田谷区駒沢 2-6-16	03-3422-9530
株森緑地設計事務所	03-5484-6070		藤内誠一	108-0014	港区芝 5-26-30 専売ビル	03-5484-1550
株URリンケージ	03-6803-6200		高橋和嗣	135-0016	江東区東陽 2-4-24 サスセンター	03-6803-6222
株ライフ計画事務所	03-5626-4741	○	金子隆行	136-0071	江東区亀戸 6-58-12	03-5626-4740
株ランズ計画研究所	045-322-0581		満生朋子	220-0004	横浜市西区北幸 2-10-36	045-322-0719
株ランドプランニング	047-710-6120	◇	萩野一彦	271-0092	松戸市松戸 1230-1 ピアザビル 9 階	047-710-6220
株リアライズ造園設計事務所	06-6941-1151		田中幸一	540-0026	大阪市中央区内本町 1-1-6-401	06-6941-1154
株緑景	06-6718-6880		上田純也	543-0001	大阪市天王寺区上本町 6-9-14 上本町ビル	06-6718-6850

会員名	電話 番号	協会代表者	〒	所在地	FAX 番号
アゴラ造園株	03-3997-2108	荻野淳司	179-0075	練馬区高松 6-2-18	03-3997-2252
イー・トップ株	03-6261-4484	峯 公一郎	102-0075	千代田区三番町 7 番地 14	03-6261-4485
株石勝エクステリア	03-3709-5591	川崎鉄平	158-0094	世田谷区玉川 2-2-1	03-3709-5857
石黒体育施設株	052-757-4030	石黒和重	464-0848	名古屋市千種区春岡 2-27-18	052-763-8110
株ウォーターデザイン	03-3431-8070	荒川展幸	105-0004	港区新橋 6-9-2 新橋第一ビル	03-3431-8116
内田工業株	052-352-1811	内田裕郎	454-0825	名古屋市中川区好本町 3-67	052-351-1326
H . O . C 株	0956-48-8101	鎬流馬清規	858-0907	佐世保市棚方町 221-2	0956-48-8111
株SDAT	06-6605-1166	仲 則幸	545-0014	大阪市阿倍野区西田辺町 1-1-1	06-6606-4033
株岡部	0764-41-4651	奥村慎一郎	930-0026	富山市八人町 6-2	0764-31-6340
快工房株	048-291-7721	石井裕士	333-0816	川口市差間 2-14-5	048-291-7725
株環境産業	0228-25-3416	佐藤貴浩	989-5611	栗原市志波姫南郷外沼 66 番地	0288-23-6142
小岩金網株	03-5828-8828	一戸典夫	111-0035	台東区西浅草 3-20-14 JNT ビル	03-5828-7693
コサカ建材株	052-433-5821	菱田淳仁	453-0837	名古屋市中村区二瀬町 53 番地	052-433-5847
株コトブキ	03-5733-6691	小林大祐	105-0013	港区浜松町 1-14-5 D.I. センター	03-5733-6672
株ザイエンス	03-3284-0501	津野瀬浩司	101-0035	千代田区神田紺屋町 17 ONEST 神田スクエア	03-3284-0504
株サカエ	0422-47-5981	栗田耕司	181-0004	三鷹市新川 4-7-19	0422-49-2122
株サトミ産業	0258-87-5500	佐藤 勉	940-0871	長岡市北陽 2-14-23	0258-87-5501
株三英 景観事業部	04-7153-1511	棚田信幸	270-0119	流山市おおたかの森北 1-8-6	04-7153-3627
篠田株	058-245-5183	高田一行	501-6004	羽島郡岐南町野中 1-8	058-240-2661
スイコー株	06-6412-5855	矢島由浩	660-0857	尼崎市西向島町 86 番地	06-6414-2284
西武造園株	03-4531-3600	本郷壮一	171-0051	豊島区長崎 5-1-34 東長崎西武ビル	03-4531-3610
積水樹脂株	06-6365-3204	井川忠興	460-0003	大阪市北区西天満 2-4-4	
大嘉産業株 産業資材事業部環境施設部	03-6716-0885	坪井秀敏	140-0001	品川区北品川 2-32-2 六行会総合ビル	03-6716-0826
太陽工業株 東日本営業 2 部	03-3714-3461	中島康友	154-0001	世田谷区池尻 2-33-16	03-3791-7731
大和リース株	06-6942-8011	野田夏夫	540-0011	大阪市中央区農人橋 2-1-36	06-6942-8051
タカオ株	0849-55-1275	高尾典秀	720-0004	福山市御幸町中津原 1787-1	0849-55-2481
TSP太陽株	03-3719-3721	池澤嘉悟	153-0043	目黒区東山 1-17-16	03-3791-0953
テック大洋工業株	03-5703-1441	小俣智裕	144-0052	大田区蒲田 4-22-8	03-5703-1444
東亜道路工業株	03-3405-1813	荒木亨一	106-0032	港区六本木 7-3-7	03-3405-4210
株ドゥサイエンス	03-5561-9751	香取良一	106-0032	港区六本木 4-1-16 六本木ハイツ 511 号	03-5561-9726
株トーションコーポレーション	03-3714-0151	塚田俊介	152-0001	目黒区中央町 2-35-13	03-3710-1191
トーヨーマテラン株	0568-88-7080	八木道雄	480-0303	春日井市明知町 1512	0568-88-3370
株中村製作所	047-330-1111	櫻田正明	271-0093	松戸市小山 510	047-330-1119
日都産業株	03-3334-2216	西尾幸三	168-0081	杉並区宮前 5-19-1	03-3334-6211
日本体育施設株	03-5337-2616	奥 裕之	164-0003	中野区東中野 3-20-10 ケイエム中野ビル	03-5337-2610
長谷川体育施設株	03-3422-5331	中田慎一	154-0004	世田谷区太子堂 1-4-21	03-3412-8415
花豊造園株	075-341-2246	勝山禎彦	600-8361	京都市下京区大宮通五条下る二丁目堀之上町 518 番地	075-361-0961
日石石材株	03-5637-9211	渡辺昌照	131-0033	墨田区向島 3-39-14	03-5637-9213
株日比谷アメニス	03-3453-2401	藤原拓磨	106-0047	港区南麻布 3-20-1 Daiwa 麻布テラス 4 階	03-3453-2426
株風懸セコロ	048-558-0077	竹田 靖	361-0026	行田市大字野字八ツ島 3341-7	048-558-0078
株富士植木	03-3265-6731	成家 岳	102-0074	千代田区九段南 4-1-9	03-3265-3031
前田工織株 東京本社	03-6402-3944	近藤宏之	105-0011	港区芝公園 2-4-1 芝パークビル A 館	03-6402-3945
前田道路株	03-5487-0031	牧 次次郎	141-8665	品川区大崎 1-11-3	03-5487-0039
株前山	052-841-9250	堀 浩之	467-0803	名古屋市瑞穂区中山町 4-17	052-852-0300
株丸山製作所	03-3637-4340	丸山智正	136-0071	江東区亀戸 7-5-1	03-3683-7553
株モクラボ	0790-66-3210	関根純一	671-2411	姫路市安富町三森 421-3	0790-66-3810
株ユニソン	052-238-1187	荒川直樹	473-0925	豊田市駒場町藤池 17 番地 1	052-238-1178

編集後記

CLAjournal をご覧いただき、ありがとうございます。今号は、例年のCLA 賞受賞作品の紹介と合わせて、GREEN × EXPO2027 の紹介と、「みどりでまちが変わる、人とつながる」として、様々な様態の公園や緑地での活動を紹介させて頂きました。全国に展開する様々な現場での取組みに対して、敬意を表するとともに、貴重な事例を頂戴することが出来ました。

「みどり」の役割は従来、環境保全・景観形成・レクリエーション・防災・生物多様性確保などの視点から論じられてきましたが、現代社会においては、まちづくり・コミュニティ・市民生活などの重要な要素として、なくてはならない存在となっています。高度化し、複雑さを増す現代社会において、みどりの意義は多様化しています。ランドスケープ職能は、多様化するみどりをデザイン、マネージメントすることによって、地域社会、市民生活に貢献しています。



発行日 2025 年 10 月 23 日
発行人 金清典広
編 集 (一社)ランドスケープコンサルタンツ協会
広報委員会
発行所 (一社)ランドスケープコンサルタンツ協会
〒103-0004 東京都中央区東日本橋3-3-7
近江会館ビル
TEL 03-3662-8266 FAX 03-3662-8268
https://www.cla.or.jp

※本ジャーナルの無断複製・転載・転用は固くお断りします。